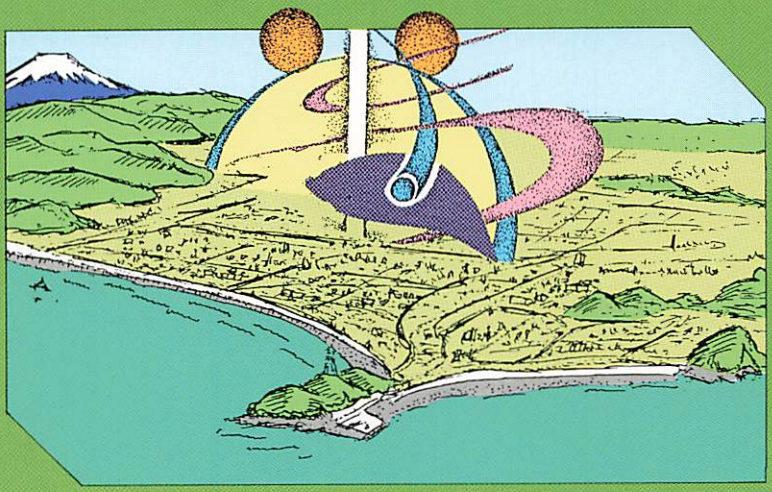
第10回 教文研教育シンポジウム記録

新しい学校の創造

――教育課程のあり方を考える――



神奈川県教育文化研究所

シンポジスト

・木谷　要司
（前横浜国立大学教授）

・小山　紳一
（平塚市立金田小学校教諭）

・丸茂　高
（横浜市立境木中学校校長）

コーディネーター

・金原　左門
（中央大学教授）

1997年2月15日(土)

於：藤沢市労働会館

シンポジウム

新しい学校の創造

――教育課程のあり方を考える――

○司会（榎本事務局長）　きょうは本当にありがとうございました。初めに教文研の所長の方からあいさつをいただきます。

県教文研所長あいさつ

○稲垣県教文研所長　こんにちは、県の教文研の所長の稲垣です。土曜日の午後、シンポジウムにご参加をいただきまして、ありがとうございます。また、共催ということで会場の準備その他、今日までご準備いただきました湘南教文研の皆さんに心からお礼を申し上げたいと思います。

昨年の七月に、中央教育審議会から「二十一世紀の教育を考える」という形で第一次答申が出されました。そのキーワードが「生きる力」と「ゆとり」であることは既にご承知のとおりでありまして、そのためにいよいよ二〇〇三年から完全学校週五日制が実

現されると当然教育課程が変わってくる。そしてゆとりを持たせるということから授業時数が削減されるだろう。ところが、一方で国際理解、環境教育、さらには情報化教育という形の中で、新たな教育要求の問題が突きつけられています。そして学校をスリム化して、地域と家庭と学校の役割分担を明確にしていこうと言っていますけれども、本当にそうなってくるのかどうかという点では極めて不安もありますし、また関心の高い問題だと考えているわけです。

しかし、この間の教研集会でもありましたけれども、二〇〇三年ならそれまで待っていればいいじゃないかという意見が現場の一部にあることは事実です。私は、教育課程の自主編成という立場からいっても、この問題を現場が十分論議し、検証し、そして基礎基本のあり方、厳選についても現場からの声を反映させていくべきだと考えているわけです。そういう意味できょうのシンポジウムが一つの問題提起ということも含めまして、参考になってくると考えています。

コーディネーター並びにシンポジストの皆さんとともに、このシンポジウムが成功裡に終わることを期待いたしまして、簡単ですけれども、あいさつにさせていただきます。ありがとうございました。よろしくお願いします。（拍手）

○**司会**　続きまして、七地区教組それぞれに七つの教育文化研究所が設置されております。県教文研はこういうシンポジウムのときに、当該地区教文研と共催という形をとらせていただいております。そこの湘南教育文化研究所の竹村所長からあいさつをいただきたいと思います。どうぞよろしく。

湘南教文研所長あいさつ

○竹村湘南教文研所長　こんにちは、全県から藤沢まではるばるおいでくださいましてありがとうございます。ちょっと変わった建物だというふうに思われるかと思いますが、ここは藤沢市の労働会館と言いまして、この湘南地域で働く勤労者のための施設として随分前につくられたものです。これをつくった当時、私どもも含めてさまざまな思い入れを込めてつくった建物です。そこを出ますとある丸い明かり取りの窓も、「ピースマーク」というちょうど平和のシンボルのデザインを使っているあたりに、この建物にかける地元の思いをぜひくみ取っていただきたいと思っています。

さて、『翔べ！神奈川のこどもたち』という冊子をごらんになったことがおありでしょうか。今からもう十年近く前になると思いますけれども、神奈川の当時の長洲知事が提唱した「騒然たる教育論議」ということに端を発した「ふれあい教育運動」の中で、これは当時の神教組も、あるいは県内のさまざまな教育関係の方たちも、みんなさまざまな論議を重ねた中でつくられた一つのまとめの冊子でした。当時、国の中央段階では指導要領が変わって、指導要領の中に「するものとする」という言葉が散りばめられ、記者会見の席上では文部省の役人から「処分」という言葉が出てくる。非常に教育の中央統制といった色彩が強かった時代に、神奈川では神奈川の教育論議の中でどんなことを言っていたかと言うと、むしろ教育というのは、それぞれの地域の子どもたちの実情に合わせて、各学校が創造的に教育課程をつくり出していくべきものなんだ、という提起を今から十年ぐらい前にもうしてい

たわけです。ある意味では、当時神奈川のそういう提起は、日本全体の教育の流れから言えば必ずしも主流ではなかった。むしろ異質なものと思われていた時期もあったのかもしれません。それから十年がたちました。今の中教審の動向等を見ると、神奈川の地域に根ざした教育論議の中でつくられてきた、そのような考え方がむしろ時代を先取りしたものであり、決して間違っていなかったんだということを改めて思っています。

ただ同時に、その『翔べ！神奈川のこどもたち』の中の一言を、私はむしろ重たいものとして受けとめるんですけれども、こう書かれています。教育課程がそれぞれの各学校の主体性、創造性に任せられたとしても、今度は現場の先生たちが、そのことをいわばめんどうくさいものとしてうとんじたのでは何にもならないんだと、そんな意味のことが書かれています。

確かに私たちは今非常に大事な場面に立たされていると思っています。今の流れの中でそれぞれの学校の自分たちの言葉で、自分たちの足元に立ってどんな教育課程をつくり出していくか。まさにそれが問われているわけですから、きょうこれから行われますこのシンポジウム等を通して、これからいよいよ私たちがどんなものをつくるか、ぜひそこに皆さんの英知と大いなる論議を重ねていきたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○**司会**　受付のところで、きょうの資料、レジュメをいただいたと思います。それをベースにこれから討論に入りたいと思います。なお、質問用紙等が入っておりますので、書いていただいて、途中で私の方で回収して、また後半の会を始めたいと、このような形にしたいと思います。

では、コーディネーターの金原先生、よろしくお願いします。

シンポジウム

○**金原（コーディネーター）**　金原でございます。私は神奈川県教育文化研究所の発足時から研究評議員をしておりまして、現在、県教文研の評議員は三十数名おりますけれども、その世話役と、それから事業部を担当しております。

きょうのシンポジウムは、実は昨年の二月の横須賀、つまり、三浦地区なんですが、「学校の役割と教育課程の再編――新しい学校をもとめて――」ということで、教育課程を初めて主題に掲げたシンポジウムを行いました。それを受けてきょうは、昨年の総論を各論の一つにおろして考えていこうと、こういう趣旨であります。

一昨年、文部省の初等中等教育局に教育課程企画室が設置されました。これが今発足をしております教育課程審議会の前身に当たるわけですが、そこで明確に打ち出していたのは、先ほどの県教文研所長のごあいさつにもありましたように、完全学校週五日制のもとで、同時にカリキュラムを編成し直していくということです。振り返ってみますと、文部省は、昭和五十年代ですから、一九七〇年代から八〇年代にかけて、「ゆとりと充実」ということを掲げておりました。そして一九八〇年代、昭和六〇年代ですが、このころには「新しい学力観」ということを打ち出してきたわけです。私にいわせると、今回の文部省の教育課程審議会に託する考え方は、その二つの線上に立って、いかに学校のスリム化を図っていくかに狙いをおいているようです。つまり、完全学校週五日制はスリム化という事柄と結びつくわけですけれども、それを打ち出してきている。その中で教科というものが、恐らく戦後五〇年を経過した教育史の中で初めて大きな問題として、これをどういうふうに持っていくかとい

うことが課題になってきているのではないだろうかと思います。

そこで県教文研としては、その間、第十五期の中央教育審議会の第一次答申をめぐりまして、急遽これを分析しながら、どう対処していくかということを『教文研だより』に昨年の夏まとめました。それから神奈川県教組の方でもこれをめぐるシンポジウムを行ってきております。これは「第十五期中教審答申とこれからの学校」ということで、やや問題提起に終わったんですが、まだまだ我々は課題提起をしながら、それにどう対処していくか、そういう模索をしなければならないと思います。

そこで、そんなことを勘案しながら、きょうは先ほど申し上げましたように、昨年の総論を各論の一つとしてカリキュラム改革の方に持っていくという形で論点を絞りまして、そしてそこからよく言われておりますように、学校の風景をどう変えていくかということで、メインテーマに掲げた「新しい学校の創造」というところにつなげていきたい、こういうふうに思っております。

これから三人のシンポジストをご紹介いたしますが、実はカリキュラムと言っても多様な構成になっておりますけれども、きょうは皆さんお話をお聞きになる中で、「こういう教科が中心になっているな」と、なぜこの教科が各論の一つとしてしょっぱなに取り上げられているのかということを、まずお受けとめくだされば非常にありがたいと思います。

まず、真ん中にいらっしゃるのが木谷先生であります。横浜国立大学の教授を長年務めていらっしゃいまして、昨年の三月に退職されました。ご専門は理科教育でございます。理科教育の理論と方法についてよくお考えになっていらっしゃる方でございます。

それから、皆さんの方から向かって左側は丸茂先生であります。横浜市立境木中学校の校長の職におられますが、現在横浜教育文化研究所の環境教育の責任者をされておられます。大変ユニークな校長であるというふうに私は思います。

それから、一番右側は小山先生です。平塚市の金田小学校に勤めていらっしゃいます。現在教職にありながら、もう一つは平塚教育文化研究所の課題教育の中で中枢を担っていらっしゃる方であります。それで、特に生活科について実践的にやられている方であります。

こう申し上げますと、もうそろそろどういうカリキュラムの流れの中でお話になるか大体予測がいただけたかと思いますが、きょうのスケジュールを申し上げますと、三人のシンポジストに大体十五分から二十分ぐらいの間、できるだけ時間は短い方がよろしいんですが、それぞれ問題提起をしていただきまして、それから十分ぐらい休憩をとります。その間に質問票を提出していただければ大変ありがたいわけです。それから討論に入っていきたいと思います。多分私の考えているスケジュールの中で誤差が少なければ、三人のシンポジストに、ほんの二、三分で申しわけないんですけれども、若干補足をしていただきながら、シンポジウムを展開していきたいと思っておりますので、よろしくご協力をお願いいたします。

それでは、これから「先生」と名前を呼ぶのをやめまして、「さん」にいたしたいと思いますが、では、木谷さんからまずお願いいたします。

○木谷（前横浜国立大教授）　本日のタイトルは「新しい学校の創造――教育課程のあり方を考える――」と、こういうことになっております。私は、まず学校は変えられるのかという問題から入りたいと思います。

本当に学校を新しく変えられ、創造できるのでしょうか。私はできると思います。実際に学校を変えつつある努力もあります。ここに一冊の本がございます。『毎朝の読書が奇跡を生んだ』、これは昨年高文研という本屋から出た本であります。この本の中には、先生方が朝十分間だけ子どもたちに本を読ませようということを始められまし

た。そうしましたところ、学校の中で結構反対もあったそうですけれども、子どもたちはびっくりするくらい朝の十分間の読書を楽しむようになった。神奈川県の大沢高校、この高等学校の先生から私はこの本を贈っていただいたんですが、大沢高校の先生からメッセージがあります。

「まだ奇跡を生んだというところまではいかないけれども、本当に子どもたちが変わってきた。決してレベルの高い高校ではないけれども、子どもたちが非常に意欲的に読書に取り組むようになった」ということであります。そしてこのような動きは全国の小・中・高校でたくさん見られ、先生方が驚いている。そしてまた子どもたちも驚いているわけです。本というのはこんなにおもしろかったのか。これは私は大変なことではないかと思うんです。

きょう先生方のお手元にあります「教育課程開発の試み」という『教文研だより』の中身でございますけれども、昨年の秋に教文研でチームを組んで、四国の高松付属小学校、それから付属坂出中学校、愛媛大学の付属松山小学校、みんな付属ではありますけれども、非常に意欲的に教育課程の開発実験をやっておりますので、どういうあんばいか見に行こうと。特に坂出中学校は、まだ世の中が混乱して食うや食わずの先生が多かった時代、昭和二十年代から四十年間大変意欲的に教育課程の開発に取り組んできております。私も若いころから注目しておったわけですが、最近、今は「クロスカリキュラム」と言われておりますけれども、その先駆けとも言える「自由学習」というものに取り組んでいる。そのレポートなどを目にして、「ぜひ見ましょう」ということで、坂出にも行ったわけです。そこで非常にびっくりしましたのは、生徒が意欲的に取り組んでいるということもありますけれども、先生が変わってきた。あんまりいい言葉ではありませんけれども、近ごろのはやりの言葉で申しますと、先生がハマっているという感じなんです。もちろん子どもたちも年に二回の約二ヵ月間の「自由学習」の期間ですけれども、その取り組みの跡を見ましたが、大変意欲的でございました。詳しいと

ころは、この『教文研だより』をごらんいただきたいと思います。

いきなりクロスとか、総合とか、あるいは教科横断とか言いますと、難しく感じるわけでありますけれども、今までの授業を省みますと、余りにも教科の枠の中にこもり過ぎていたのではないかと反省させられるわけです。そのお手元のレジュメにも書きましたけれども、例えば私は理科ですので、例を挙げますと進化論の話。教科書で進化論を扱います場合は、どこの国で誰がどういう理論を述べたか、その概要が述べられているだけです。イギリスで一八五八年にチャールズ・ダーウィンが進化論というのを唱えた。それより五〇年前にフランスでラマルクが用不用説というのを述べた。どちらも完全に正しくはなく、そのうちにド・フリースが用不用説を述べたと、ただそれだけです。

ところが、先生方もご承知のように、ダーウィンが一八五八年に進化論を述べました時には、イギリスの社会はもう上へ下への大騒ぎになった。何しろ人間と動物の間には天地の懸絶がある。人間は神がつくりたもうたものである。動物たちは神が人間のためにつくってくれたものである。そういった大きく違う動物、ずうっと下の方のサルと同じ仲間から人間が変わってきたと言うんですから、一番怒ったのはキリスト教関係者なんです。本当に大騒動になって、社会に市民勢力というものがしっかりしていなかったならば、チャールズ・ダーウィンはジョルダノ・ブルーノでありませんけれども、それこそ火あぶりになっていたかもしれない。本当に大きな衝撃を思想界に与えたんだと、こういうことは一行も中学校の教科書にも、高校の教科書にもない。私はこういうことはやっぱりまずいのではなかろうかと思います。

ジェンナーが一七九六年に種痘法を開発しました。この時も大騒ぎになった。何とはるかに下等な牛の痘瘡の膿を人間につけると、痘瘡にならない。それは結構だと言う人もいましたけれども、「乳しぼりの女たちが痘瘡にならないわけはそういうことなのか、なるほど、なるほど」と納得した人も多

かったんですが、多くの人たちは「牛の膿をつけるだなんて」ということで、先生方もご承知のように、突然ご婦人に角が生えるとか、朝起きてみたら脚にひづめができていたとか、全身に毛が生えるとか、この辺から牛の芽が生えて出てくるとか、そういうふうなご存じのカリカチュアも描かれまして、大騒動になった、こういう話。これは大変大事なことで、科学というものが社会と非常に深くかかわりあっているということなんですけれども、およそ理科では恥ずかしながらほとんどノータッチでありました。

私も中学の教師を二十三年間やりまして、進化論も割と詳しくやったつもりですが、そんな話には触れませんでした。私は今、こういうことがまずかったんじゃないか、これが理科をおもしろくなくしていたのではなかろうかと思うわけです。

常に幅広く研修して、新しいものをつくり出していかなきゃいけない。常に研修をしなきゃいけないということを今ごろになって反省しているわけですが、実は東洋（あずまひろし）先生が東京大学の教授でいらっしゃったころに、現在、東洋先生は白百合女子大の教授をしていらっしゃいますが、東洋先生から評価に関する現職教員の研修会でお話を伺ったことがあります。最後に東洋先生が私どもにお話になられたことに、こういうことがあります。アメリカの大学の留学からいよいよ日本に帰ってこようというときに、恩師のクロンバック先生に、「お世話になりましたが、いよいよ私は日本に帰ります。日本の国に帰って学校の活性化、教育を新しくしていくということについて、先生、何かお言葉をいただきたいんですが」と申されたところ、クロンバック先生が「スクール・バーニング・システム」ということをおっしゃった。「スクール・バーニング・システム」、毎年毎年学校を燃やすのだということです。物理的に燃やすのではなく、観念的に燃やす。おととしこうだった、去年もこうだった。だから、今年はこうしましょうと、古いノートをひっくり返してやっていくのではなく、

もうやったことは終わり。目の前の子ども、そして子どもの将来を考えてプランメイキングをする。そうでなくては教育は新しくなりません、活性化はできませんということをグロンバック先生が言われたということです。

私は、今「新しい学校の創造」ということを考えますときに、その言葉を思い出すのであります。教文研の所報にも紹介させていただきましたし、本日のレジュメの私のまとめの裏にも引用させていただいておりますが、アメリカに滞在された福田悦子さんという方と、そのお嬢さんお二人の留学の体験を教文研で伺ったことがあります。アメリカと言っても広うございまして、ピストルを先生が携行しなければ命が危ないというような学校がある反面、福田さん親子は大変恵まれた地方の学校にいらっしゃったようでありまして、そこでこういう長所がアメリカにはありました、という話をうかがってすごくうらやましく思ったわけですが、特に詰め込みということがおよそなかったという点、およそ詰め込みとは無縁の世界であったという点に私は非常なうらやましさを感じたわけです。

日本では勉強というのが、実は子どもの心を荒らし、学校が苦役の場になっている。そして根深く子どもの心の中に勉強ぎらいの心が育っているんじゃなかろうか。その原因は先生方もご承知のように、試験による選別であり、輪切りというものに対する心理的な圧力であります。この勉強ぎらいとか、学校ぎらいの実態というのは、もう先生方は目の前の子どもたちを見てある程度ご存じだろうと思いますけれども、数字にも出ております。先ごろ教文研でも行いましたところの「子どもの生活と意識の調査」九五年のものであります。そのまとめも先生方のお手元にいっていると思います。

相模原市の総合教育研究所で、『相模原教育』というのがありますが、その九五年の十月、一一四号の「子どもたちの様子を探る」というものに資料が出ております。これを見ますと、やはり子どもたちが学校に行きたくないとはっきり言っているのと、多少とも行きたくないと言っているものの数が、

大体三割以上です。これは小学校から中学校に進むにつれて、この数はふえております。詰め込まれるばかりで疲れ果てている。そういうことでは新しいものをつくり出す活力がなくなっているんじゃないか。これが日本という国の活力のなさにだんだんなっていくのではなかろうか。最近円も安くなり、株も安くなっております。ということは、日本からお金が逃げ出していくということです。貿易黒字も大変なテンポで減っております。ちょっと将来が危ぶまれる状態ですけれども、こういうことは考えておかなくてはならないことではないかと思います。

こういう問題の根本には一つ気になる現象があります。それは国際学力テストでの肝心な学力、特に考える能力とか、あるいは日常への応用の能力、こういう点で日本人は劣っております。最も問題なのは勉強が楽しいという数が国際比較でも日本の場合にはぐっと落ちております。これは福武書店、今ベネッセと言いますが、ベネッセの「モノグラフ・小学生ナウ」という調査が頻繁に発表されておりますけれども、そこでもそのような数字が発表されております。

「楽しい」というのはどういうことか。これはもう一昨年になるかと思いますけれども、ＮＨＫの「脳と心」という番組が一年間にわたって放映されました。先生方もご覧になった方が多いと思いますけれども、そのことを思い出していただきますとよろしいんですが、「楽しい」という場合には、脳に入ってきた、インプットされた快の刺激が脳の深部の視床下部に送られて、そしてここから扁桃体、お手元の資料にもありますが、扁桃体というところにいって、そこからＡ10という神経を通って、主として前頭葉に送られて、これが意欲と行動の源泉になっていくということであります。要するに、幼いころから「楽しい」「おもしろい」という学習経験を積んでいくと、それが結局生涯学習の基礎になる。そういうわけで、ぜひ学校でやるべきことは、学ぶことのおもしろさ、学ぶ喜びを教えることではないか。これが第一ではなかろうかと思います。少なくともきらいをつくってはいけない。何々

ぎらいというのをつくってはいけないと思うわけです。一度きらいをつくると、一生その勉強とは無縁ということになります。これは大きな罪であります。

理科の苦手意識というのは、お母さんの理科の苦手意識、これは子どもにてきめんに影響いたします。歴史というのは大変おもしろいものでありまして、私は学校での試験の呪縛から解放されましてから、非常に歴史がおもしろくなりました。試験がないから楽しく読めるわけであります。考えてみますと、人間が過去を知り、そこから現在を思い、未来を思うという働きは人間にしかできないことではないでしょうか。調べてみますと、チンパンジーなども意外と賢く、言葉が使えるものもいる。しかし、歴史を思うということは人間だけであります。非常に重要な人間の教養の中核だと思うんですが、しかし、学校はせっせっと歴史ぎらいを育てているんじゃないか。学校でなくてはできないこととというのは、興味関心の火種をつけて、生涯学習の基礎をつくる。そしてもう一つは、人間の社会性を育てるということではなかろうかと思います。そういうわけで、私は、勉強をおもしろくするということと、社会性を育てるということが学校の大きな目標であり、存在意義であり、そしてそういうところに重点を置いて、新しい学校づくりのことをやるべきではなかろうか。

一応時間が参りましたので、この辺で打ち切らせていただきます。

○**金原**　どうもありがとうございました。さしあたり、整理はいたしません。ただいまの木谷さんの資料は、一枚目の後ろにその骨子が載っておりますので、ごらんください。

それでは続いて、丸茂さんにお願いをいたします。

○丸茂（横浜市立境木中校長）　私は、戸塚に住んでいるんですけれども、夜の九時過ぎ、十時ごろになりますと、いっとき「子どものまち」に化してしまうんですね。塾が終わって、あちらこちらの塾からワーッと子どもたちが出てくるわけです。昨年までは東横線の日吉の駅周辺が学区である中学校に勤めていたんですけれども、たまたま夜遅く十時、十一時ごろに電車に乗ることがあったわけです。そうすると、塾のかばんを持って、小学生が乗り込んできたりするわけです。そういう姿を見たり、あるいはフィールドワークをやっているので、あちらこちらに出かけるんですけれども、特に公園で子どもたちの遊んでいる姿がほとんどない。とにかく先生方の中に随分若い方もいらっしゃるようですけれども、私自身の子どものときには考えられないような光景が現在繰り広げられているわけです。

結局、子どもが子どもらしさを発揮できないまま、大人に向かって一目散に成長を強いられているような、そんな気すらするわけです。そしてその結果として、一昔前はよく「三無主義」だなんて言って、「無感動・無気力・無関心の子がふえちゃった」なんて言っておった時代もありましたけれども、あらたに「新七ない族」、もっと挙げれば切りがないぐらいあるかと思うんですけれども、適当にそんな名をつけてレジュメの方にちょっと示させてもらいました。

全部を説明する時間がありませんので、例えば人間関係が非常に弱くなってしまって、他への思いやりが非常になくなってしまった。その例として、昨年の夏騒がれたO－一五七の問題があるのではないか。本来であれば、病気で苦しんで、やっと学校に出てこれるようになったらば、「誰々ちゃん、よかったね」と肩をたたく。それが本来の友だちだろうと思うんですね。それが「うつるから遊ばない」、あるいはいじめに走ってしまう。信じられないような人間関係ができてしまっているのではない

か。

エイズ教育が各学校で展開されているかと思いますけれども、やはりここでも同じような問題がきっとあるのではないか。先日、アメリカのエイズの状況を写真におさめた写真家の話を聞いたんですけれども、エイズになって本当の友だちと、うわべだけの友だちがはっきりしたというような言葉を言っていた感染者がいたという話を聞きましたけれども、そういう面でも本当に人間関係が非常に弱くなってきている。わからないことを休み時間に、「誰々ちゃん、ちょっと教えて」と言っても、相手は競争相手ですから、「いや、僕もわからないよ」ととぼけてしまう。そういう話すら聞く昨今です。

それからよく学校現場では、「子どもたちは指示をしないと動けない」と言うわけです。要するに「指示待ち人間」がふえちゃったと言うわけですけれども、指示をしても動かない。とにかくめんどうくさがり、やりたがらない、そういう子がふえてきているのではないでしょうか。そしてそういう子どもたちを知らず知らずのうちに我々大人が、あるいは我々教師がつくっていってしまったのではないでしょうか。そういうもろもろの反省を込めて、多分第十五次の中教審の答申がなされたんじゃないかと思います。そして先ほども話がありましたように、「生きる力」というのを非常に前面に出してきたわけです。レジュメに示しましたけれども、よく見てみると、真新しいことは一つも入っていない。従来から力説していたことの集積ではないかと思うわけです。しかし、この「生きる力」を養うということ自体は、何ら異議を申し立てるものではないんですけれども、ただ、よくよく考えるともっと大事なことがあるんじゃないでしょうかと考えざるを得ないわけです。

私自身は理科の教師なんですけれども、自然の法則を学び、あるいは数学や、英語や、国語、いろいろな学習をして、ふと気がついてみたらば、自分の生きる場所がないということになりかねないんじゃないかと思うわけです。我々は食物をとらなければ、多分一ヵ月か、二ヵ月後には死んでしまう

のではないか。水を飲まなければ一週間、二週間で命が失われてしまうだろうと思いますし、ましてや空気を吸わなければ数分で命がなくなってしまうわけです。私たちの日常生活、特に日本人は便利で快適な生活をするために、エアコン、あるいは携帯電話、格好いい自動車、本来なくても生きていけるもの、私が子どものころにはこれらはみんななかったわけです。それでも生きてこれたわけです。生きていくのに必要なものでないものを必死につくり続けて、実は土も、水も、空気をも惨たんたる状況にしてしまったわけです。先日の国連の発表では水が悪いために一日に世界で二万五〇〇〇人が死んでいるという記事が新聞に出ておりましたけれども、我々横浜市民は、実は上流の人たちが二回から三回使った水を、三回目、四回目の水道水として飲んでおります。上流の人たちのトイレの水すら飲んでいるわけです。土も、水も、空気も知れば知るほど本当に危機的状況になっているのではないでしょうか。そういう中で私自身は、環境教育が絶対不可欠な教育ではないかということを非常に強く感じている一人です。

そこで、資料（65ページ以降を参照）に現在の地球環境の状況をできるだけ数字を盛り込みながらつくりました。時間がないので、その中の幾つかをちょっとご紹介したいと思います。

一つは、地球誕生から四十六億年がたつわけですけれども、余りにも長い年月なので実感が持てないので、それを一年間にたとえます。一月一日を地球誕生の日にして、そして現在を十二月三十一日の終わろうとしている、その瞬間だとしますと、二〇〇万年前の人類の誕生は、何と十二月の三十一日、大晦日の夜八時過ぎなんですね。そして戦後五十年とよく言われますけれども、五十年前にはまだ横浜の緑比率は八〇％でした。今は全く逆転して緑比率が二〇％を切りましたけれども、この五十年間で我々は決定的な地球環境にダメージを与えました。これは一年間に直すとわずか〇・三秒、瞬間です。その間に非常に取り返しのつかないような状況に地球を追いやってしまったわけですけれど

も、その幾つかを紹介したいと思います。

③の森林の削減というところでは、現在もすごい勢いで森林が伐採されているわけですけれども、一年間で日本の本州ぐらいの面積が失われていると言われているわけです。子どもたちはなかなかピンとこないので、よく「グラウンドの何倍だよ」とかいう形で説明をしているんですが、たまたま横浜市の面積と、一日に失われている森林の面積がほとんど同じなんです。だから、一日に横浜市の面積ぐらいの森林が、この世界から消えている。そしてあと百年たつと、もう森林らしき森林はこの地球にはなくなっちゃうと国連が警告しています。

それから、次の④のオゾン層の問題ですけれども、オゾン層は「層」と言うんだから、非常に大量に厚く存在するように思われがちなんですが、実は上空ですので、ものすごく希薄なんです。この地上に持ってくるとオゾン層の厚さはわずか三ミリなんです。その三ミリがこの地球の生命体を保護してくれているわけですけれども、そのオゾン層が今急速に破壊されてきて、私たちの上空で既に十数％減ってしまっています。この間の新聞では北海道が三〇％減ったという話が出ておりましたし、南極大陸の一・五倍の大きさで、あの南極大陸の周りのオゾン層が消えてきているという話があるわけです。そしてこのオゾンが破壊されるといかに怖いかということをぜひ知ってもらいたいんですが、これは世界のあちこちで売られている、日本では売られていない紫外線測定器です。世界各国でこういうものが、自分の身を紫外線から守ろうということで売られているわけです。一九九〇年には国連が毎日の紫外線の強さを国民に知らせなさいという勧告まで出しています。幸い日本もこの四月から出すことになりました。

要するに今はちょっと曇っていますけれども、お昼過ぎに藤沢の駅に降りたって測定したときに紫外線指数は二・六でした。七までを測定できるようになっているんですけれども、これを使うと、き

ようのこの日差しは何分間だったら浴びてもいいですよという許容時間が表示されます。それは三十五分間でした。きょうのお昼ごろの日差しは三十五分間が限界なのです。

そしてオーストラリアが一番紫外線の被害を受けているんですけれども、既に二十年ぐらい前の十倍も、二十倍も皮膚がんだとか、白内障の患者がふえてきているそうです。根本的には人間の抵抗力を非常に弱めると言われているわけです。そういうことでオーストラリアでは帽子をかぶって長袖を着て、サングラスをかけて、そして日焼けどめクリームを持って外出します、これを使いますと、きょうの日差しの中で、外でどうしても三時間活動しなければいけないというときに、ボタンを押すと、それではナンバー幾つのクリームを塗りなさいということが指示されてきます。そういう状況に今、地球が陥ってしまったんだということをぜひ知ってほしいと思います。そして中波の紫外線Bと言われているものは、生物が陸上に誕生してから初めて浴びている紫外線です。その影響がどれほど怖いかは残念ながらまだわかっていないわけです。あとは資料にぜひ目を通していただければと思います。

それからもう一つだけ、日本はゴミが出ると、それを焼却するのが大前提になっておりますけれども、世界の焼却炉の数が二、五三九あるうちの七三％が日本にあります。一、八四一ヵ所の焼却炉があるわけです。今はベトナムの国土がダイオキシンで一番汚染されておりますけれども、数年で世界で一番ダイオキシン汚染されている国は、何とこの日本になってしまうわけです。そして母乳の中のダイオキシン量の測定値を示しておきました。いかに日本のダイオキシン汚染度が高くなっているかお分かりいただけるでしょう。大都市になればなるほど、その傾向は強くなっているわけです。ぜひ現在のこの地球環境の状況を少しでも知っていただければと思います。

それでは話を先に進めますが、この資料の中の六ページ（73ページを参照）の右上のところに、「二十一世紀の地球は」ということでグラフがありますが、これはローマクラブと呼ばれている世界の科学者

集団が一九七〇年ごろ、地球は将来どうなるのかという予測を一度立てて、それから随分年数がたったので、一九九〇年にもう一度世界の学者が集まって、二十一世紀の地球予測をしたときのデータの一部です。今このまま人類が同じような生活を続けるならば、このシナリオ一と呼ばれている、このようなパターンを描いてしまうだろう。だけども、一九九五年までに、もう既に過ぎてしまいましたけれども、九五年までに適切な手段を講ずれば、このようなシナリオ一〇と呼ばれるパターンを踏んで人類の滅亡は免れるだろうというグラフです。

そこで、最近強く感じるのは、あちらこちらの熱帯雨林やなにかの中で細々と生活をしていた先住民の人たちの生き方です。ちょっとここに示しましたので読ませていただきたいと思います。「私たちはチプコと呼ばれている。チプコというのはインドの言葉で抱きつくという意味。私たちは木が切られるとき、木が切られないように木に抱きつく。そして木とともに切られ、既に二百人が死んだ。今私たちの森にあなた方の国からたくさんの人が来て、たくさんの木を切り、たくさんのダムをつくろうとしている。ダムができると森が沈み、私たちは生きていけない。このようなことが二度と行われないように、私たち十万人のチプコは死ぬ覚悟をしている。よく聞いてほしい。私たちは決して貧しくない。私たちは豊かだ。私たちは何も欲しくない。ダムも、電気も、お金も。あなた方は経済という宗教にとりつかれてしまった。あなた方の神様はお金、儀式は開発、いけにえは地球。あなた方の神様からの贈り物は、飢えと公害と戦争、開発は自然を殺し、いっときの富みをもたらすが、永遠の生活と幸せを失う。私たちは開発ではなく幸せを求めている。幸せとは小さな土地と、少しの水と、少しの食べ物で十分なのだ。幸せはお城から来るのではなく、自然の中に既にある。悩みは欲の中にあり、幸せとは欲から解放されること。あなた方はどこへ行くのか」という訴えがモントリオール国際環境会議のときにあったわけですが、この老人は、ここにも書いておきましたけれども、直前まで

牢獄に入れられておりました。そして出た後、このことを訴え、引き続いて断食をして、今では命を絶ってしまっているわけです。

こういうことを考えると、先住民の生き方というのは、地球が永遠に続く、永続可能な生き方であり、我々の文明はやがて地球を破滅させ、滅びる文明なのではないかということを強く感じるわけです。そして先住民族の人たちは、自分の生き方の中で知らず知らずのうちに環境教育を学びとっていたんじゃないか。だから、我々は、今どうしても環境教育があえて学校の中で、あるいは家庭、地域の中で必要になってきているのではないかということを非常に強く感じ、そして先住民こそ本当の文明人なのではないかということを感じるわけです。

そこで、学校における環境教育はどう取り組んでいったらばいいのかということなんですけれども、何年かやってきて非常に強く感じていることは、環境教育は物を大切にする心を育て、他を思いやり、命を大切にする心をはぐくむ教育なのではないか。そしてお互いが少しずつ我慢をしながら、共にいきていくことをいろんな活動を通して、五感を通して学んでいく教育なのではないかということを強く感じております。

そして、どうしても我々の今の価値観を変えていく必要があるだろうということを感じ、体験学習を多くし、座学だけの環境教育に終わったのではだめだろう。そして、まさに体験を通して知識が知恵に変わっていくのではないかということを強く感じるわけです。そこで学校教育のすべての教育活動の中で工夫をし、創意して取り組んでいくことが必要なのかなということで、ちょっと例を示しておきました。本来の「総合学習」という言葉は少し違った使い方をしているのではないかと思いますが、ちょっとごらんおきください。そして環境教育はクロスカリキュラムを組む非常によい場にもなるということで、次に示しておきました。

ここでは水を例にとり上げましたけれども、いろんな教科で、いろんな形で水にかかわった学習ができるのではないか。そして先生方は、多分フォークダンスのマイムマイムをご存じかと思いますけれども、あのフォークダンスは水のない村に井戸を掘って、やっとその井戸に水がわいてきたというその喜びを、井戸を中心に輪になって踊っている姿なんだということを感じ取ってもらえば、あの曲のリズミカルな面がよくわかるのではないかなと思います。いろんな形でクロスさせながら学習を深めていくことが非常に大事じゃないかと思います。

そしてそのためにはどうしても教職員の共通理解が不可欠です。そしてそのために非常に有効なことが二つあると思うんですが、一つは地球環境の今のこの悲惨な状況をみんなで知るということ、職員室から始めることによって知らず知らずのうちに共通理解がなされていくということではないでしょうか。学校の日常生活の中でいろんな取り組みがなされていかなきゃいけないと思うんですけれども、一つ一つ話す時間がないんですが、きのう横浜市の環境教育の教研活動があって、そこで驚いたのは三十幾つの学校からレポートが提出されて、そのうち両面印刷されていたのはたったの三校です。ほとんど袋とじなんですね。全く紙のむだ遣いになってしまったわけです。ぜひ学校全体で両面印刷に取り組んでほしいと思います。

時間が来たようなので、もう一言だけ、二の「学校は地域の付属機関だ」ということが、本来の「新しい学校の創造」というところになるんですが、先ほどのコーディネーターのお話の中にも、学校がスリム化していかなければいけないという指摘がありました。そのためには学校と家庭と地域の連携をもっと深めることが実質的なスリム化につながっていくだろうということです。そして地域の教育力をもっと活用していく。例えば地域を調べるときに、地域の人たちに協力をしてもらう。中学校ではクラブ活動がありますが、クラブ活動を三つのパターンでやっている学校があるんです。学校の教

師が教えるクラブ活動、地域の人に学校に来てもらって、子どもが教わるクラブ活動、そして子どもが地域の施設に、いろいろな施設があるわけですから、そういうところに行って学んでいる。そういう三つの場面が用意されている学校があるわけですけれども、そんなこともスリム化の一つにつながるのかなと思います。

もう一つは、地域社会の拠点校として学校が果していく部分がいっぱいあるのではないか。それが地域の付属機関としての学校の役割だろうと思います。ＰＴＡ活動で、ガイヤシンフォニーという、環境問題やなにかを扱った映画なんですが、これをＰＴＡが計画しています。地域にポスターをパーッと張って、地域の人もぜひ学校に見に来てください。そんなことをやったり、ファイバーリサイクルだけをここでは示しましたけれども、リサイクル活動を通して古着を、捨てるにも捨てられずに家の中に置いてある家庭が結構あるんですが、それを学校がちょっと音頭をとることによって、そういう古着のリサイクル活動に地域ぐるみで取り組むことができます。

それからもう一つは、学校をもっともっと公園のようにしていく必要があるのではないか。生徒のいる、児童のいる親だけが学校を訪ねるのではなくて、近所の人が乳母車に赤ちゃんを乗せてくる。老人が孫の手を引いてくるということが許される。そういう学校になってほしいなと思います。そしてそういう学校になるように、子どもと教師と地域の人たちが夢を追う活動そのものが教育ではないかなと思います。

時間が来てしまったので、三の「大人が手本を示そう」（74ページを参照）という文章を資料に添えておきましたので、ぜひ後ほど読んでいただけたらと思います。十三歳の子の訴えです。我々大人には非常にインパクトのある言葉ですので、読んでいただけたらばと思います。以上で終わります。

○**金原**　シンポジストのご報告、あるいは問題提起についての関連性は後で私が整理をいたしますの

で、引き続き小山さん、お願いいたします。

○小山（平塚市立金田小教諭）　こんにちは。ここは普通の舞台と違いまして、すり鉢の底にいるような感じで、ふと思ったんですけれども、いつも一年生、二年生って小さい子を見ていると、子どもたちは我々からいつもこうやって上から見おろされて、今自分が感じているのと同じように恐怖感というか、脅威というか、そういうのをすごく感じているのかなと思ったんですけれども、先のお二人の方のお話を受けてという形ではないかもしれません。言葉の中にも地域とか、いろいろ出てきていましたけれども、生活科というのは、今ちょっとすり鉢の底にいて、子どもはいつも見おろされて脅威を感じているのかなと思ったのと同じように、何かできるだけ子どもの側に寄り添って、そこと我々の意図との接点を見出しながら、いろんな子どもの育ちを見ていこうというふうな教科ではないかと思うわけなんです。その中で特色ある一つの学習の形態といいますか、その中で地域というのがかなり大きなウエートを占めているように思います。もちろん製作活動、振り返り活動、飼育、栽培、探究活動といろいろありますけれども、それらはどこの場面で活動していくのか、展開していくのかといったときに、学校の教室、廊下、校内全般、運動場とか、中庭以外の、もっと地域に出て、そこに教材といいますか、素材を求めて展開をしていくことが多くあるわけなんです。そこでレジュメに載せてありますのは、自分の学校だけじゃなくて、自分が以前いました学校や、聞いたお話の中で、例えば地域があり、特色のある学校ではということで、数は少ないんですけれども、ちょっと載せてみました。

まず、地域とのかかわりを考えたときに、地域そのもの、場所ということと、それから地域の人たち、人材といいますか、そういう部分って大切だと思います。そこに住んでいられる方たちの場合で

すと、学校に来ていただく。来て、先ほどちょっとお話がありましたけれども、講師といいますか、子どもたちにお話をしてもらうとか、そういう来てもらうかかわり、それから子どもたちが地域に出ていくかかわり、その人というのも特定な人の場合もあれば、不特定な人とのかかわりを見ていく場合もあると思います。もちろんこういう分け方がいいかどうか、これ以外にもあるかどうかはわかりませんけれども、とりあえず自分なりに考えて、こういうふうな部分でちょっと考えてみました。

まず、学区探検、地域の探検ですけれども、どこでもあると思いますが、これはこれなりにいろいろ安全面の配慮とか、いろんな問題が残されているかもしれませんけれども、地域をどう生かすかという点で考えていったときに、例えば具体的な例としましては、地元の商店街とか、工場とか、会社とか、また、私が前におりました学校には、地域の中に小さい牧場なんかもありました。そういうところとコンタクトをとりまして、商店街の人、地域の方、子どもが行きそうな目ぼしい施設である、公民館も含め、そういったところといろいろコンタクトをとって、子どもたちがそこをフィールドに学習していくときに、できるだけ学区探検が実現できるように事前の手だてをとっていったということです。

例えば商店街でありますと、そこに依頼状というお願いを書いた紙を持って、(町場の学校じゃちょっと無理だと思いますけれども、ちょっと外れの方ですので、ちょこちょことかたまった商店街なんですね) 一軒一軒回ることができます。そこを回ってお願いをしてくる。当日は我々もついていきますけれども、そういうふうな形で、いわゆるお店探検みたいなものもできるわけです。終わった後は、またお礼にごあいさつというんですかね、そういうことをしに行くというアフターケアまでちゃんとしないと、次の年のこともありますので……。

そこでは不特定な人とのかかわりということで、いろんなところにお願いはしていきますけれども、

ひょっとしたら、歩いているときに見知らぬ人、見知らぬと言うとちょっと怖いですけれども、その人達に「どこそこはどう行ったらいいですか」と道を尋ねるといったかかわりも出てきますので、不特定な人とのかかわり、また地域の人とのかかわりができてきます。今ちょっと怖いと言いましたけれども、交番にもお願いして、ちょっとパトロールをしてもらうこともあります。実は商店街の裏の反対側が畑とか、ちょっと森っぽいところがあったりするところがありまして、そこは昼でも人通りが少ないということで、お願いしてパトロールをしてもらうわけで、交通事故以外の安全面も考えなきゃいけないことが出てきます。もちろん我々も、それからお母さんたちも知らん顔してその辺に立ってもらうために、ある人にお願いしたら、近くの農園で麦わら帽子をかぶって、タオルを首に巻いて草むしりをしているおばさんがいまして、よく見たらクラスの子のお母さんで、「先生が子どもにもわからないようにと言われたので、ここで草をむしっています」というようなことで、子どもの様子をそこで見ていただいたということもありました。

これは子どもたちの方から地域に出ていくことですけれども、もう一つ、「お祭りをしよう」では、特に地域と関係があるのかないのか、分かりませんがやりようによってはいろいろかかわりが持てます。そこでは、地域のお祭りをみんなで調べるといった一つの探究活動的な部分も入れます。そこで自治会や、お祭りの実行委員会というんですかね、そこの長老、古老といいますか、そういう方にその地域でのお祭りのお話をいろいろ伺ったりとか、これも宗教的な問題等いろいろありますので、必ずしもそれを子どもたちに移していくというわけではありませんけれども、地域の中の年間行事の一つとしてのなりわいがどうなのかということに触れていくことになります。

自分たちのお祭りをしようという形で校内でやったときに、その方たちを招待して、おじいさんたちも一緒にミニ祭りというんですか、地域のお祭りと比べれば小さいものですけれども、かかわりを

持っていく。もちろんそれも次の年、さらにその次の年ということで、その学年の味つけの仕方は違いますけれども、基本的な形でお願いしていく。これは特定な人とのかかわりということが言えると思います。

それから、今いる学校では農園がありますので、お米ですと二五〇キロ分ぐらいとれるような田んぼと、それの半分ぐらいの畑があります。栽培活動も言うほどにはなかなかうまくいかない部分があります。大変だということが一言で言えばあるんですけれども、特に農業協力員さんという方をお願いしてありまして、それは学校としてお願いしてあります。そういう人たちに事前に畑を耕していただくんです。子どもの手でやるということが基本的にはあるんですけれども、その前に本当に大きい耕運機でやっておいていただかないと、かなり深いところまでやるのは子どもでは無理ですし、あるいは牛ふんをまぜておいていただくとか、そういう形で、基本的なベースづくり的なところはその方たちにお願いしておきます。

子どもたちには、「やってあるから平気だよ」とは一切言いません。感謝の会とかなにかがあるんですけれども、それまではなるべく自分たちでやっているという感じで、シャベルを持っていったり、スコップを持っていってやるわけなんです。これは特定な人とのかかわりで特別に学校に来てもらう。種まきの時は、種を売っている近くの園芸屋さんですね、そういう人たちを呼んだり、あるいは今言った協力員さんに、ノウハウを子どもたちが直接教わって種まきをするとか、栽培をすることもあります。接点として地域の人とのかかわりがその辺からあるということですね。

それからもう一つ、市街地の方の学校に行きますと、平塚は七夕があります。七夕踊りとかもありまして、大体その時期になると、七夕踊りを学校でやったりとか、最近はちょっと減ったように思いますけれども、ひところは運動会は全員で七夕踊りを踊ったりと、そういうふうな雰囲気もあったと

ころなんです。カーニバルとか、阿波踊りみたいに、銀座通りの七夕飾りの下をパレードすることがあるんですけれども、「じゃあ、そこに僕たちも出てみよう」という子どもたちの考えの中から、七夕踊りを練習することになります。そのときに地域の探検とかで公民館に行った際に、「あそこで七夕踊りの練習をおばあさんたちがしていたよ」ということで、その人たちに教えてもらおうと、公民館を通して地域の老人というんですかね、七十、八十のおばあさんたちだったそうですが、その方たちと触れ合いながら、学校に来ていただいて、七夕踊りを教えてもらう。そうすると、ふだん我々が教えていた七夕踊りがいかに間違っていたかということに気付き、正調の七夕踊りというのを子どもが教わり、それをほかのクラスや、おうちの人に教えてあげる。教えに行ってやるという感じで、意気込んで活動をし始めたということがあります。当日は老人会の連の中で自分たちも加わって一緒に踊る。おばあさんとの交流もただそれだけではなく、何かのときにつくったものをプレゼントするとか、また別のときに招待して、自分たちの劇を見てもらうとか、発表を聞いてもらうといったかかわりにも発展していく。そういう形での地域の人とのかかわりというのがあります。

ここで地域に出ていくときに、よく地域マップというのがあります。それをつくって、地域に出ていくときに、我々が子どもたちにどういう支援ができるかといえば、やっぱり我々が地域を知らないと、なかなかできませんので、そのために事前の学習ということで我々の地域マップをつくらなければなりません。つくるためにつくるわけじゃなくて、つくるために地域に出ていくわけですね。そういう活動でまず我々が地域に出ていく。そこがかなり大事な部分なのかなと思います。これにより地域のマップをつくり、それを子どもへの支援の一つの資料としていくということがあると思います。

また、子どもが地域にでて探検をすると、その結果それをもとに、じゃあ一年生に教えてやろうということで、マップをつくることもあります。また子どもが出ていく前に、簡単なマップを先生が子

どもにあげて、子どもがそこに行く場所を書いたり、こう行ってみようと思ったりと、実際に明細地図なんかをパッと渡されても、二年生の子どもではなかなかわからない部分があります。そこは我々がちょっとデフォルメしたような形で渡してあげるということもあると思います。大体社会科で地図の学習をやりますけれども、絵図、絵地図、地図というレベルの違いもはっきりとはわかりませんけれども、絵図というと、漫画的なものになると思います。それをかき入れることによってかなり地域を自分たちの目で見つめ、その子たちなりの目的を持って回っていけるので、そういう意味では地域マップはいろいろな使い方ができるので、必要だと思います。

ただ、最近はどうなんですか、よくわかりませんけれども、ひところ生活科と言われたときには、即地域マップを作ろうというのがありまして、結構どこの学校でもつくられたんじゃないかなと思いますが、まだそれがつくられていない学校もありますし、一回つくったからいいよというところで、一頓挫しちゃっているところもあるかなという感じを持っています。

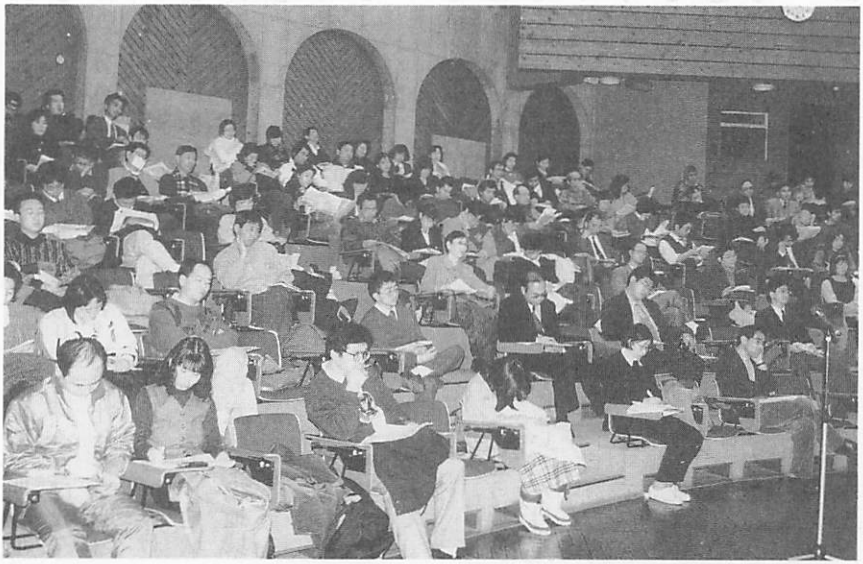
また、人材マップというんですか、ちょっと言葉はどうかわかりませんけれども、どこにどういう方がいられて、その方はどういうことを子どもに教えていただけるか、どういう話をしていただけるか、戦争中の話をしていただける人とか、わらじづくりとか、そういう伝統的なものをやっていられる方とか、お祭りのことをいろいろやっていられる方など、そういう意味で人の地図をつくっていくと地域とのかかわりがそれによってよくなるだろうし、また、つくる過程で、さっきも言いましたように、かかわりが見られていくということもあると思います。

それから、一番下に四角で書いてありますけれども、「かかわりを持つための糸口」ということで、PTAの行事とか、そういったところでのかかわり、学校を挙げてのかかわりがあると思います。そのときだけかかわりを持とうと思っても、なかなか虫のいい話で、地域を利用するという感じになっ

てしまいますし、ふだんから我々が地域に出ていくとか、地域とコンタクトをとっておく必要があります。地域と言ったら、そこに住んでいる誰かさんということでもいいと思います。そういうことから広げていくような考え方をしていく中で、それが子どもたちにかえってきたり、学校教育の中で広がりが見られたり、深まりを持っていけるものじゃないかなと思います。何より地域は子どもにとって安心感があります。いつもいるところですから繰り返しができます。自分で自主的に、自発的に、あるいは自由にもう一度それをやることができます。

そういう意味での地域の見直しというんですが、素材の見直し、教材としての見直しということを、ここらあたりで考えていかないといけないのかなと思います。もっと広げれば小学校ブロックだけじゃなくて、中学校ブロックぐらいの広さにまで広げて考えていく必要もあるでしょう。もう少し時間がありますけれども、長話はいけませんので、終わりにさせていただきます。以上です。

○**金原**　三人のシンポジストのご報告をお伺いしま



した。それで時間が大分押しておりますので、初め十分ぐらいの休憩を予定していたんですが、少しみみっちい節約の仕方ですが、六分ぐらい（笑）ということにいたしたいと思います。その間にぜひ質問票を私どものところに提出をしていただくようにお願いいたします。それでは休憩にいたします。

―休　憩―

○**金原**　再開をしたいと思います。

幾つか質問が出ておりますが、まず、ただいま三人のシンポジストのお話をお伺いして、私の方で整理してみます。ただし、すべての論点にわたって整理をいたしません。あるところに力点を置いて申しあげますので、若干シンポジストの意思に反するようなことになるかもしれませんが、それは後で是正していただければと思います。

木谷さんのお話の中で重要なことは、中教審では教科の総合化と精選、それから厳選化ということを言っておりますが、理科教育の側から見たら、教科の枠を超えるということ、それから何よりも重要なことは低学年の児童から、おもしろさといいますか、興味を持たせるようにしていくということと、したがって、教科の枠を超えることとの関連で言えば、社会性を持たせるということを強調されていたように思います。つまり、幼いころからの体験重視ということ、さらに勉強好きにしていく場としての学校ということが重要になってくるということを改めて知りました。

それから丸茂さんの場合は、環境教育を窓口にした、それこそ中教審で言っている「生きる力」といいますか、児童の生きる力ということを強調されていたように思われます。そして特にO－一五七、それから地球の森林伐採の弊害とか、オゾン層の問題を例に挙げながら地球が危ないと。地球が危な

いということの認識を通じて、ローマクラブの例をお出しになって、こうすれば危ない地球をどういうふうに考え直していくことができるかという、これもまた認識の問題でありますが、そこまで論点を展開されています。

そして環境教育ということが、実は各教科の総合化の重要なポイントになってきているということをご指摘になっているように思われます。そこから改めて環境教育の取り組みの問題ですね。これは教育課程で言うクロスカリキュラムの問題が新しく提出されていると受けとめることができます。そして何よりも環境教育でございますから、具体的に地域とのかかわり合いということが重要なかぎになってきております。

その地域の問題を、生活科の実践を通じて小山さんはお話になられたわけであります。そうすると、そこで重要になってくるのはレジュメにもありますように、地域の人と場のかかわり合いということになろうかと思います。

お三人のお話になられたことは、もう少し抽象化して言えば、教科の中で、基本・基礎というものをどういうふうにつかまえ直していくかということと、それからそれを公教育の現場でどういうふうに受けとめていくかということを実践的に、かつ方向づけも考案しながら取り上げていくという論点になっていると思います。と申しますのは、今回の第十五期の中教審の第一次答申を読んでおりますと、私が、ちょうど十年ほど前の臨時教育審議会の議事録を全部読んだとき感じたこととよく似ていることが一つあるんです。それは、何かものわかりのいい論点が出ているということです。この点は従来の答申とちょっと違うところでありますけれども、しかし、下手をすると、観念論で終わるおそれがあります。つまり、絵そらごとに終わってしまう。例えば教科における総合化ということと、厳選、精選ということは一体どうかみ合って、しかも、相互に両立して、そしてカリキュラムとして展

開し得るかということになると、恐らくそう簡単にはいかないだろうと思うんです。

例えば、丸茂さんの環境教育を各教科の窓口にするといった場合には、これは総合化でありまして、決して何を精選し、何を外して厳選するかということとはちょっと矛盾するようになって、必ずしもそれは両立をしない。むしろ精選していくと、本当の環境教育というのは失われていくのではないかというおそれすら出てくるという感じがいたします。

それから小山さんのお話をお聞きしておりますと、いや、これは大変なことで、学校のスリム化どころじゃなくて、学校と地域とのかかわり合いを強めれば、逆に家庭、それから地域学校との関係がますます複雑、多面的な面が次から次へと生まれてくるという問題も含んでいると思うんですね。だから、中央教育審議会の答申をどう受けとめるかということは、実は私たちも若干議論をしてきているわけですけれども、日本と、神奈川の教育の将来構想をどうするかという大きなプランの中で検討する必要があります。そして新しい学校づくりという課題は抽象的に言ってもだめなんで、三人のご発言の中にもありましたように、やっぱり児童、生徒を変えていくということです。そしてさらに、教師がどう変わっていくかということとの関連の中で学校の風景が変わっていくということになるわけなんですね。そうすると、教育課程の方法をどういうふうにつくり上げていくかという、そこへまた舞い戻ってくるというふうに思われます。

幾つかそれにかかわるような質問が出ておりますが、その中で、実は大変重要な指摘なんですけれども、神奈川の高校入試の問題が依然として大きなかかわりを持ってきております。せっかく出されたんですけれども、きょうは、時間の関係でちょっと外させていただきたいと思います。いずれ、別の機会をもちたいと思います。まず丸茂さんのところにいろいろな質問が出ております。

論点は、望ましい環境教育ということになりますが、それにとりかかっていく場合に、一つは、大

きな新しい問題として提起がされてくるのが、原発の問題なんですね。何人かの方がこのことに触れておられます。まずその辺のところから少し簡単にお話し願えませんでしょうか。そしてもしそれに対してご発言がありますならば、ペーパーを提出された方でも結構ですし、そのほかの方でももちろんご自由ですが、問題をフロアの方から出していただければと思います。

○**丸茂**　横浜のランドマークタワーができて、浮き足だっている部分があるんですが、あれも必ず壊す時期が来ると思うんです。原発も必ず、やがては老朽化し壊すときが来るわけですね。その処理の費用まで考えれば、この原発がいかに矛盾をはらんでいるのかわかるのではないかと思いますし、ただ、日本は世界一停電の少ない国だと。平均するとたった五分。だけど、欧米は七〇分とか、八〇分停電しているわけです。停電しないがために原発はどんどん、どんどんつくって、真夏のあのピークの電力需要にこたえようとしている。いやというほど自動販売機がある。こういう生活を改めない限り、結局原発必要論がずっと日本では生き続けちゃうんじゃないかと思うんです。だから、そういう面でドイツのコール首相が『生活水準をみんなで下げよう』と、発言。そういう首相を選ばなければ原発問題は根本から解決しないと思っております。

○**金原**　という丸茂さんのご発言ですが、いかがですか。何人かの方が質問を出されているんですが、無記名で質問状を出していただいていますので。…もしなければ、丸茂さんと小山さんとのかかわり合いで、地域が媒介になってきますので、小山さんに出されている生活科の問題にはいりたいと思います。小山さん、ちょっとお願いいたします。

○**小山**　一つは、生活科で育てたものが三年生以上の子どもたちにどう反映していくかというご質問だったと思います。地域もそうなんですけれども、先ほど最後にちょっと言いましたけれども、地域というのは自分たちが住んでいる場所ですので、子どもたちにとっては安心感があるし、そこでの学

習というのは日常化しやすいわけですね。繰り返しできる、体験できる、自発的にできるということ、そういうことを考えていったときに、特にこれは生活科だけの問題じゃなくて、三年生以上の部分でも、例えば三年生なら地域学習的な部分での地域とのかかわりというんですかね、農村地域であれば、その土地利用であるとか、工場があれば、その工場について、施設について学習するとか、自分たちでそこを生活科のときとは違って、今度は社会科のその単元における教科目標、単元目標というものをもうちょっとはっきり持って、子どもたちがそういう目的意識を持った活動ができるのではないでしょうか。

それから平塚の場合ですと、同じ市の中でも市街地、それから工場がいっぱいある地域、畑、田んぼ、ちょっと山になっているところ、小さい平塚でもいろいろ地域により違いがあります。学校同士の交流などを通して子どもたちが、同じ市の中でも地域により違いがあるということから、自分たちの住んでいる地域はどういう地域なのかということを学習していくような場面もできると思います。

四年生になれば、ちょっと県の方に広がっていきますけれども、自分たちの地域をベースにして考えていく。さらに五年生ぐらいになってくると、これは難しいかもしれませんけれども、自分が五年生をやったときには、金田地域は農村地帯ですので、地元の農業を中心に、農業政策から、生産効率、そして、そのための工夫や苦労などを学習していく。野菜の生産を学習する中で、今度は工業に、さらには車を通して運輸といった学習に移っていくということになります。それほど詳しくしていないですけれども、一応大ざっぱに農業と車で一年間を通しながら、オープンエンドで、うまくいったかどうかはわかりませんけれども、そういった地域とのかかわりができると思います。

六年生であれば地域の歴史に触れ、史跡をめぐって、そこから歴史の勉強の糸口を見い出し、「あっ、おもしろいんだな。自分たちの近くにもこんな土器の破片が出るんだ」とか、「昔はここのお寺はこんなことがあったんだ」ということから、興味を持って学習に入っていく。そういうことで地域を知っていくことも良いと思います。いろんな歴史を勉強した後でまた地域に帰って、「そうか、このお寺はそうだったのか」ということが確認できた時、地域のありがたみが分かると思います。三年生以上の学習において、内容のつながりということが、地域を通してできるというように思います。

もう一つは、生活科というのは、いろんな要素の中で子どもは育っていきますので、環境と体験ということが子どもの育ちにかなり大きく影響すると思います。だから、我々がさまざまな教育環境をつくってあげれば、子どもたちはその中で自由に泳いで自ら学ぶということを学習していければいいと思うんです。三年生以上の場合では、よく自分で言っているのは、玄関と居間の考え方なのですけれども、例えばここに玄関があって入っていきます。そうすると、一五〇人から二〇〇人の子どもが玄関から入ってきて、そこにはいすが全員分あって一人一人座れるわけですね。それはどういうことかと言うと、追求場面での個別化ができる。自分なりの追求ができるわけです。それが生活科でやっ

てきたような自分の願いを持ってその実現に向けて活動していくことができるのかなと自分では考えています。

ほかの教科は、一つの入口があって、みんなが算数でも、理科でも、社会でも入ってくるわけですね。何かを追求していくときに、じゃあ、それぞれの子どもが自分なりの追求を考えていって、どこか最後には、科学認識であるとか、社会認識であるとかいうところに終息する部分というのもあるかと思います。そこに先生の支援が入ると、またそこで、限られた部分に終息していく。そういう紡錘形の授業が三年生以上の中では考えられていくのではないかと思います。そうすることによって割と自由な探究心で、調べたりとか、つくったり、表現したりすることができ、子どもを生かしやすいんじゃないかなと考えています。

それと基本的には、カウンセリングマインドというんですかね、子どもになるべく寄り添って聞いてあげる、見てあげる。聞いてあげるというのもちょっと高飛車かもしれないですけれども、なるべくそういうことをくみ入れながら学習を進めていけたら、一本の筋としては通っていくのかなと自分では考えています。

○金原　今お二人のご発言にたいして、特に小山さんの生活科と地域との関係でご質問なさった方がお二人いらっしゃるんですね。ご意見がありましたら、手を挙げていただければと思います。異議がなければ、当然手を挙げてもしようがないということになりますよね…。

追加のご意見がなければ、きょう、提出されている問題の中で、どうしても触れなければならない論点があるわけです。それはこういうことです。

つまり教材の選択に関してですが、教科を編成する上で非常に重要なんですけれども、それを扱う教師の側の問題があるのではないかというような意味なんです。つまり、教師がその教材をどうやっ

てこなしていくのか、あるいは個々の教師だけじゃなくて、教師の共同作業のような事柄も当然ながら必要になってくるわけですね。質問では、「教師同士のかかわり」という表現を使っていらっしゃるんですが、その辺の問題はやっぱり議論しなきゃならない論点だろうと思うんですが、木谷さん、どうですかね。ちょっと触れていただければと思います。

○**木谷**　ぜひ扱ってもらいたいというような教材があります。私は、詰め込みはいけない、教え込みはいけないということをしきりに言いますけれども、無手勝流で教育はできない。やっぱり年長の者が「これこれはこうなんだよ。実はこうなんだよ」ということを言わなきゃ子どもは気づかないです。大学生でもそうです。気づかない。

例を一つ挙げさせていただきますけれども、土曜日の午後、お休みになる時間をこんなふうにお集まりいただくような熱心な先生方は、もうちゃんとやっておられるだろうと思うんですけれども、一般的に言うならば、私は、日本において平和教育とか、あるいは原子力の問題とか、そういうことはまだまだ取り組みが甘いと思います。人権の教育、平和教育というのは取り組みが甘いのではないか。全般的にはそういうことが言えるんじゃないかと思うんですが、世界の現実というものについて、学校場面で少し教えなさすぎているという面がある。これは今お話にもありましたように、先生同士の共同作業でこういうものの教材化というのをしていく必要があるのではなかろうか。

いかに軍備、あるいは戦争というものが愚かしいものであるか。そういうことは先生方は皆さんご存じですけれども、子どもはやっぱり知らない面がある。今カンボジアを初めとして、アフガニスタン、あるいはボスニア、あるいはルワンダ、こういったところで埋められている地雷の総数は一億一〇〇〇万あると言います。一日中一生懸命探知機で除去作業をやりましても、大体六畳一間ぐらいが限度だそうです。この調子だと、今埋められている地雷を全部除去するのに一〇〇〇年かかる。もの

すごい発明でもできれば別ですけれども、一〇〇〇年かかる。こういったことが学校で教えられているのか。私は、やっぱりこういうことを教えるのが平和教育ではないかと思います。

こういった一方で、盛んに武器の見本市では、得意気に「これは実に安くて、しかも、殺傷能力があります。殺しません、ひどいけがをさせることができるのです」。殺さないでけがをさせるとどういう利点があるか。死んじまえばもう見捨てていけるけれども、けがをしたのは三人ぐらいの手がかかる。それだけ戦力が落ちる。だから、地雷は殺しちゃだめなんだ。殺さないでいかにけがをさせるか。そういうふうなものが埋められておりますために、罪もない子どもや農民が手を飛ばし、足を飛ばしている。今こうして話している間にも出ている。こういう事実を私どもはやっぱり教えなきゃいけないんじゃないか。そういう教材化というものを連携プレーで進めなきゃいけない。ここにこういうビデオがある。これはこの間ＮＨＫでやっていたものです。ダビングしてお互いに提供しあうということは、「著作権侵害になりませんか」と、ＮＨＫの方に聞いたんですよ。

○**金原**　すみません。ちょっと簡潔にお願いします。

○**木谷**　はい。そう言いましたら、ＮＨＫの方が「ＮＨＫはそういうことは黙認しています。お金を取らなければよろしいのでどうぞお使いください」、こういうことでございましたから、しっかりお使いになってやっていただきたいと思います。

基地の問題にいたしましても、騒音はよく問題になりますが、問題は排ガスです。Ｆ16なんかがブーンと飛びますと、一時間でアメリカの平均的ドライバーの一年分の燃料を使うそうです。スピードを三倍にしたら燃料消費は二〇〇倍になるという。これによるところの温暖化、空気の汚染はすごいものでしょう。南極の氷もついに解け始めたと新聞報道がありましたが、そういうもとの一つにはやっぱり私は軍備と演習があると思います。戦争にあると思います。そういう事実を教えなきゃいけな

い。ほっておいてもこれは気づかない。こういうものの教材化は私は非常に大事だと思います。

○**金原**　教育課程審議会がこれからどういうふうな動きを示すのか、どういう事柄を出してくるのか、まだよくわからない点があるんですけれども、例えば仮に中央教育審議会の答申を読んでいくと、学習指導要領の拘束力といいますか、あるいは規制といいますか、そういうものの枠が多少緩んでくるのかなという感じもしないでもないんですが、丸茂さん、もしという仮定法で申し上げますけれども、そうなると、やっぱり教師の姿勢というのは非常に重要になってくると思うんですね。フロアの方から出されている教師の教材の扱い方の質問に関連して、それに便乗しながら、ちょっと質問したいんですが、いかがですかね、その辺。教師の姿勢の問題ですね。

○**丸茂**　例えば環境教育の重要性を非常に強く認識している一人なんですけれども、それが正直言って私の学校でも、あるいは横浜市全体の学校でもなかなか思ったようには浸透しないんですね。最終的には教師の考え方、あるいは生き方に由来する部分がすごくあるんではないかなと思うわけです。したがって、何か一つのことを教材化していこうというときに、その必要性を心の底からその教師が持つことが極めて大事だということと、それから学校というのは共同作業の場ですから、いかにその共通理解を図っていくかということが一方ではすごく難しい。共通理解の必要性は誰だってわかっているんだけれども、それをいかに共通理解していくかという、そのこと自体が意外と教師という、こんなことを言うと怒られてしまうかもしれないけれども、教師はかなり特殊な職業観を持っているんじゃないかと思うんですね。そのために共通理解を図るというのが非常に難しいのが学校という職場ではないかなと痛切に感じております。ある面では言えばわかる。子どもじゃないけれども、言えばわかるものがいっぱい、さすが教師ですからあります。従って、根気強く共通理解を図って、その教材化の必要性を持っていかなければいけないんじゃないかと思います。特に地域に出ていくときには、

見方を変えれば、先ほどから出ているようにスリム化の逆行を行っているようにも一見見えるわけです。どこまで学校がかかわるのか。私もかかわった幾つかの小学校で、お寺の和尚さんが「鎌倉道を休みの日に案内してあげる」と言っているんだけれども、校長が「そのときにもし事故が起こったらば学校の責任になるから、そういうことをやらせてはだめだ」と言うので、教師がとめられちゃったそうです。「どうしたらいいでしょう」「いや、それはもう和尚さんに私的に連れていってもらうんだから、学校とは縁を切っていいんだ。その中身は教育活動の一環だけれども、その場面は切っていいんだ」と、そういうふうに地域の教育にゆだねる部分をもっともっと我々は積極的につくり上げていっていいんじゃないかと思うんです。何から何まで全部学校が責任を持つ、そういう時代ではないんじゃないかと思うんです。

○金原　それではフロアの方にちょっとお願いします。多分横須賀の先生ではないかと思いますけれども、丸茂さんのご発言に対して、感想を記入された方の学校では、学校を挙げて環境教育をやっているというふうにお見受けしているんですが。……何かそこでの問題点とか、悩み、これをお出しになった方がいらっしゃいます。いらっしゃるはずですね。「私の勤務する小学校でも昨年より環境教育の研究をしております」、こう書かれた方はどなたですか。……分かりました。では、そこでの教師としての立場からの悩みとか、直面している問題点みたいなことをお話しいただけたら大変参考になると思います。いかがでしょうか。

○**教員**　まだ始めたばっかりで、本当に範囲が広過ぎてどこから手をつけていいのかわからないというのが、昨年の悩みだったんですけれども、そこに書いたように、すべての教科の中で環境教育にかかわるようなものを洗い出して、教科の中で取り上げていくということをやっているんですけれども、実際に学校の中で環境教育として取り組める具体的な作業というんですか、紙をむだにしないようにとか、学校の中をきれいにというものは、割と簡単に取り組めるんですけれども、例えば牛乳パックを集めて、それを役立てていくとか、学校の中の生ごみを集めて肥料にしていくとかいうことについては、地域の廃品回収とのかかわりや、先ほど先生がおっしゃったような教師のそこまではなかなか私たちにはできないという共通理解のはかり方の難しさとか、そういう点が今のところ私は感じておりますけれども、ただ、少しずつですけれども、微生物を使った生ごみの処理などを授業で取り上げて、それが父母の方々にも広がっていったという、わずかですけれども、進んでいる点もあるかなと感じています。

○**金原**　ありがとうございました。小山さん、今のお話等をお聞きしながら、生活科で、例えば地域の中に入り込んでいけばいくほど、教師の負担、あるいは悩みというのはやっぱりあるんじゃないですか。今までの実践を通じていかがですか。

○**小山**　割と表面だけ見ていると華々しいというんですかね、そういうふうなことがありますけれども、実際は先ほど丸茂さんからのお話にもありましたけれども、探検に出る、地域に出るということだけで、安全面で、「できるだけやめてくれよ」みたいな話が出てくることが、十年ぐらい前にはよくありました。ただ、研究の委託を受けたりしていると、校長もそういうことが言えませんので、「じゃ、行ってらっしゃい」という感じで行かせていただくこともありました。けれども、こちらとして

も初めての経験で、地域に行くということは、安全面のことについてはすごく気をもむことがあるんです。

もう一つは、先ほどから出ています環境の問題と絡めまして、文部省が全国の五十一校か五十八校の試行校ですか、田園地域ではザリガニをとりに行くことを計画すると、大体どこでもザリガニをとってということが出てきまして、それが定番のようになってきたんですね。これは十年ぐらい前ですけれども、我々がそういうのを資料にしてやっていく場合も、すぐザリガニになってしまうのです。それが平塚市の場合は博物館の浜口さんという学芸員の方に若干お話を聞いたりしたことがあったんですけれども、そうすると、生態系が壊れるんじゃないか、あるいは虫をとりに行くということも、やたらとってきて死んではかえし、死んではかえしという、それが本当に、良いのか悪いのかというのは自分としてはまだはっきりわからないところがあるんです。確かに本当にみんなが生活科をやって野に出よう、虫をとろうとか、「一斉のせい」でワッと、平塚市の小学校二十八校が行っちゃうと大変なことになる。大体限られたところにとりに行きますから、それは大変なことになっちゃうんじゃないかと思います。あるいは田んぼにオタマジャクシをとりに行って、畦道をぼこぼこ壊して帰ってくるとかいう問題もありました。そういう中で地域の理解を得ながら、協力し合いながらやっていくということが、やっぱり我々に課せられた部分なのかなと考えます。

環境問題に、大それたところは僕なんかもできませんけれども、そこにたどりつくような先駆けといいますか、芽に触れることぐらいはできていくのかな。だから、学校のスリム化と言いますけれども、学校は確かにスリムになるのか不思議に思うんですね。我々はだんだん肥満になっていくのですから。休みの日でも、ちょっと地域に行ったりということがあるのでしょうか。でも、それが強制されるようになってくると、ちょっとつらいものがあるなという気はしています。

○**金原**　ついでに簡単にお答えいただければと思いますけれども、中教審の第一次答申ですね、丸茂さん、これを現場としてどう受けとめられますか。今まで議論してきたことを踏まえていただいて。

○**丸茂**　先ほどの話の中でも触れたんですけれども、例えば「生きる力」の中身をこういう五つの形で示しておりますけれども、この中で本当に今度の答申に初めて登場した言葉というのはあるかと言ったら、ないんですよね。こういうことができるゆとりを我々教師にとにかくゆとりをよこさなければ、また絵にかいたもちになってしまうということを非常に強く感じております。

○**金原**　小山さん、いかがですか。

○**小山**　先ほどもちょっと言いましたけれども、地域の問題とか、いろいろ学校をもっとオープンにしていくということがありますけれども、やっぱりもとから我々が主導権を持って自主編成や、子どもの何をどう育てていけるのかということから考えていって、それで年間のカリキュラムとか、そういったものをつくっていかないと、学校は地域にいろいろ行事を移していってスリムになるとは思いますけれども、我々自身は学校と地域と両方で動かなきゃいけない。動かなくてはいけないという形になっていくと、かなり大変になってくるのです。だから、本当にうまく実現してくれるといいですけれども、「実現できるか中教審、任せていいのか教課審」、そういう感じの気持ちが今あります。

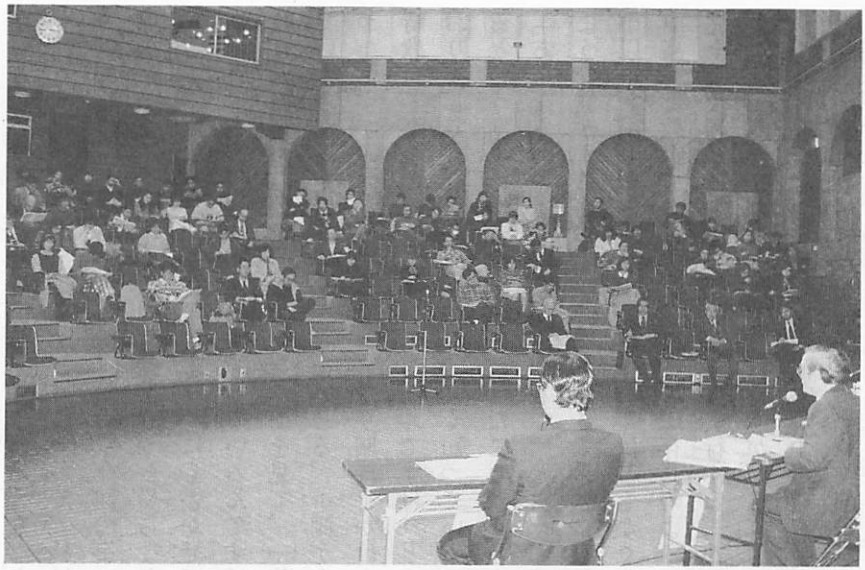
○**金原**　木谷さん、何か、お二人の話をお聞きしながら。

○**木谷**　お二人のお話に関連してというよりも、私は実は中教審の答申というものに対しては、前々から余り温かい目で見てないんですね(笑)。昭和二十年代から教師をやってまいりましたので、もうすっかりなれちゃっているという気がいたします。何回も指導要領の改訂がありました。改訂があっても現場の諸条件に大きいネットがあるから現実はなかなか変革されていかないんです。結果として、出版界にとっての景気対策にしかなっていなかったのではないか。文部省は決してそんなつもりでは

ないと思いますけれども、結果的にはそうなっちゃっている。だから、「新しい時代に向けて」と、こう言いまして、「新しい学力」と言ったって、私は学力に新しいも古いもあるもんかなんてまず思っちゃいました。そういうことですから、今回の第一次答申も、このとおりやるのは、それこそ基礎条件、基本的な条件というものの改善をもっとやらなきゃできない。そうしないとそれこそ絵にかいた餅になるということを「教文研だより」にも書かせていただきました。

○金原　そろそろ時間が迫ってきているんですけれども、私も例えば中教審の答申だけではなくて、教育課程審議会委員の顔ぶれなんかを見て、一体これから文部省が考えている日本の教育はどうなっていくのかなという頼りなさを感じる。予測が全くつかないんですね。むしろ、三人の方がおっしゃったような、何となく不安と、余り期待をかけられないなという気持ちがするんです。実は先ほど臨時教育審議会の話をちょっとしたんですけれども、臨時教育審議会の第一次答申からずうっと読んでおりまして、有力なメンバーでよく知っているジャーナリストに、私がものすごく苦労して読んでいるという話をいつか雑談風に言ったことがあるんです。そしたらこういう答えが返ってきたんです。「あんなものをよく読む気になるな」と言うんですね。意外とその辺のところに真実味、本音があるような気がするんですが、それはさておきまして、私が一番気になっているのは、中教審の第一次答申以来、国際化とかいうようなことはともかくとして、最近この一ヵ月ぐらいの間に、例えば公立の中高一貫教育であるとか、皆さんご存じのように、大学入試の年齢の特例案を出してきていますね。完全学校週五日制を二〇〇三年に実行する。これらをひっくるめて「教育改革プログラム」というふうにジャーナリズムは言っていますが、これらが改革の中心命題だとすると背筋が寒い。

　つい最近なんですが、ある何人かすごく有力なジャーナリストと話をしたさいに、いよいよ橋本内閣も、行政改革ができないから、今や文部省を目玉にして打ち上げ花火をやっているんじゃないかと



言ったら、否定も肯定もしませんでしたね。つまり、否定しないということは、そんなところに行革の意外な道筋があるのかなという感じがするんです。

そんなことを考えておりますと、私はきょうは話にならなかったんですが、学校というのは、この前のシンポジウムでもすこし問題になったような気がしますが、公教育の場から、社会教育機関であるというふうにつかまえた方がいいんじゃないかという気もするわけですね。ということは何かというと、学校教育というのは生涯教育、生涯学習の中の一つの機関であるというつかまえ方です。

そういうようなことを一つ一つ挙げていきますと、ひょっとすると、これは内閣も、文部省も困っているし、中教審のメンバーも頭をかかえているのではないか。教育課程審議会を見ますと、教育の専門家はほとんどいないんですね。思いつきが多すぎます。既成の観念にとらわれない発想はいいが、教育というのは評論じゃ困るのであって、あくまでも方法と理論を組み合わせながら、それを実践に持っていくということでなければならない。木谷さん、そうい

うふうに考えてよろしいですかね、だめだったらだめだと言ってください。

ということになると、これこそ二十一世紀の学校の風景をどう変えていくかという課題になりますが、これは要するに現場からつくり出していかなきゃしようがないという気がいたします。最後にその辺のことにつきまして、三人の方のお話をお聞きしたいと思います。きょうはフロアの方からいろいろご意見を実際にはお聞きしたかったんですけれども、質問票だけで失礼してしまいました。そういうことも勘案していただき、まず木谷さんからいかがでしょうか。

○**木谷**　現場から変えていかなければということなんですけれども、本当にそういうことをまさに私はそうだと思うわけです。そういうときにまず出てくるのが、頂点に大学入試があるから、どうしてもそれになびかざるを得ないということが必ず出てくるわけですけれども、大学入試というのはこれから非常に流動的に変わっていくと思います。特に今年のセンターテストはご承知のとおりの大問題がありました。これでまたセンターテストが変化する加速度が強まったんじゃないかと私は思うんですけれども、今後、多くの大学は実質全入になっていくでしょうし、それから自己推薦とか面接とかいうことがかなり入ってくるんじゃないか。この藤沢には慶応大学藤沢キャンパスというのがありまして、全国の高校生のあこがれの的ですけれども、なかなか入れない。それは自己推薦があり、それに基づいての面接試験という厳重な関門があるからです。全国の高校生の一番のあこがれの入りたい大学のナンバーワンです。こういうふうに自己推薦ができる、そういうものを持った子どもを育てることが、これからの現場の大きな課題の一つじゃなかろうかと私は思います。

それから、これで発言が終わりになりますので、もう一度言わせていただきますけれども、やっぱり楽しさ、おもしろさということを子どもたちに教えていくようにしなきゃいかんのじゃないか。文部省が今年「新しい学力」から「生きる力」となりました。新しい学力が発展して「生きる力」にな

るんだと文部省の方は一昨日のある研究会で言っていました。それはそれでいいと思うんですが、私は「生きる力」って何かと考えたんですが、人生を楽しく充実させつつ生きる。そのためみずから学び、問題を発見し、考え、解決していく力。人生を楽しく充実させつつ生きる。そのためにみずから学び、問題を発見し、考え、解決していく力というふうに考えたいと思いました。

そう思いましたわけは、今から二、三十年前になりますけれども、東北の方の筋ジストロフィーの子どもたちを集めた学校、この子たちは必ず死んでいくんです。近い将来必ず死ぬ。そういう子どもたちに理科を教えている先生のお話を伺いました。「なぜ理科を教えるんですか」「それは理科がおもしろいからです。人間として生まれて理科を学ぶ。そこに、その子に生きる喜びを与えるということがあるから理科を教えるんだ。役に立つとか、立たないとか、そういうことは関係ない。理科がおもしろい。おもしろいから、死んでいく子どもたちにも理科を教えるんですよ」、こういうことを言われまして、自分はそんな意識で教えているかなと思って反省させられたんですけれども、そういうことを私どもはこれからもっと考えていかなきゃいけないんじゃなかろうか。それが教える原点だと思います。

○**金原**　ありがとうございました。じゃ、丸茂さん、お願いします。

○**丸茂**　私自身は、ホタルを中心にしながら、いろいろと地域の人とかかわっているんですけれども、そのときに多分ほとんどの人は「何でそんなばかげたことをやっているんだろう」と思われるかと思うんです。ほとんど毎日一時間ぐらいはホタルの幼虫の世話で時間を費やし、二週間から長くても三週間に一度は半日かけてホタルの餌を確保しに行ってるんですが、しかし、これが続くのは、まさに今木谷先生がおっしゃたように、楽しいから二十八年間続けてこられているんです。だから、何をやるにもその原点は楽しさがなければ、強制されたものでは絶対だめなんじゃないか。自分みずからが

燃えていなければだめなんじゃないかな。その燃える原動力は何か。

例えば、三ツ沢小学校のわきにせせらぎ緑道というのがあるんですが、そこは地下鉄の水をくみ上げて流しているものですから、「ぜひホタルをやりたい」というので学校に話をして取り組んでもらいました。初めて幼虫を放流してホタルが飛んだときに、年を取ったおばあさんが、「昭和二十年代は実はここはホタルが出ていた。でもその後どぶのような臭い流れになってしまって、もう死ぬまでホタルを見ることができないと思っていた。それが見ることができた」と言って涙を流しているんですね。そういう姿、ちょっとしたそんなことにこよなく生きがいを感じ、「よし、またやるぞ」ということで、毎日のように七月から九月までは一日約一時間半から二時間費やしています。そういうばかげたことができるのは、その根底にはやはり生きがいというんでしょうか、そういう自分の生き方にもつながっている、そういうものがあるからこそできるんじゃないか。

我々が教職という場を選んだ以上は、これはもうかったるいから、めんどうくさいからいやだよじゃなくて、そういうかかわりにやはり根本では生きがいを見出してほしいと思うんですね。だけども、先ほど言ったように、自分みずからが燃え上がっていかなければいけない。そのためにはゆとりの中で自分のやりたいことが実現していく。いろんなタイプの先生がいて初めて学校というのは、いろんな場面で燃える先生たちの集合体になるのではないかなと思うわけです。そういう面でぜひいろんなことに興味を持って、いろんな方面に取り組む、そういう先生たちの集団であったならば、確実に新しい学校がつくられていくのではないかなということを非常に強く感じております。

○**金原**　じゃ、最後に小山さん。

○**小山**　こんなことを言うと怒られちゃうかもしれませんけれども、だんだん我々も高齢になってきまして、実際に低学年なんかを持っていますと、昔は割と若い先生が一年生、二年生であったんです

けれども、最近はそういうのに関係なく四十代、五十代の人でも「初めて一年生です」と来たり、「十年ぶり」とかいうので来たり、そうなってくると、子どもと一緒に農園に行ってくわを持てるかなと、そういう心配も出てきたり、今お話にあった活力がどれだけ出てくるかなという懸念も本心としてはちょっぴりあるんです。でも、それは乗り越えていかなきゃいけないということで、先ほどから楽しさということがありますけれども、本当にそうだと思います。学校はやっぱり夢の実現のプロローグという感じで、子どもが自分の夢を実現できるなと、夢を持ったり、理想を持ったりすることがすばらしいんだなということを体験していけるように、我々にその手伝いができればいいなと思います。

ですから、例えばオープンスペースなんかありますけれども、横で考えればオープンスペース、面積的にはそうですけれども、時間もオープンスペースというんですか、オープンタイムというか、チャイムで区切られない自由な空間と時間を保障していって、そこで子どもと一緒にいろんな活動を創造していけるという形になればいいなと思います。

もう一つには、マーケティングリサーチといいますか、子どもたちが今何を望んで、どういう状態で、どういう背景の中にいるのかということを、我々が市場調査をやるように、教育調査をやっていく必要性があるんじゃないかと思うのです。そこで客観的なものをつかみながら、また一方では教師の青っぽさというんですかね、そういったものも生かしながら子どもと対峙していく必要があるんじゃないのかなという気がしています。やはり今に埋没するなということと、学校にビジョンとコンセプトを持っていくということが、これからは必要になってくるんじゃないかと何となく考えています。以上です。

○**金原**　ありがとうございました。

若干時間がオーバーしましたけれども、きょうは教育課程の中の特に環境教育、生活科をめぐって

問題をとらえなおすという、課題提起にとどめたいと思います。

ここで最後に私がコーディネーターとして整理しますと、中教審の答申とか、教育課程審議会がどういうものを出すかわかりませんから、いずれにせよ変な作文になりかねない、実践性の乏しいものが出される恐れがあります。そんなことを想いめぐらしながら、きょうのシンポジウムに提出していただいたご質問だとか、あるいは感想を含め、三人のシンポジストの話をお聞きして、新しい教育のシステムを変えていくのは、やっぱり学校と地域と家庭との関係をどう再生するかが鍵になってくるような気がします。きょうは正面切って問題にしなかったんですが、学校の中における教師、児童、生徒、あるいは地域における共同性の問題、つまり、協力し合って、横の連携をいかに図って、そこから新しいエネルギーをどうつくり出していくかということが一つのポイントになるような気がますます強くなってきました。この辺の事情を考慮願い、きょうは教育課程の一つのシンポジウムとして受けとめてくだすっ

（伊藤県教文研副所長　左）

て、話題になった事柄を、課題として皆さんに受けとめていただければ、このシンポジウムの意味はあったんだろうと、私は勝手に想像しております。どうもありがとうございました。（拍手）

○**司会**　長い時間どうもありがとうございました。もう一度シンポジスト、コーディネーターの皆様に拍手をお願いしたいと思います。本当にどうもありがとうございました。（拍手）

では、終わりの言葉として伊藤副所長の方からあいさつをいたします。

閉会のあいさつ

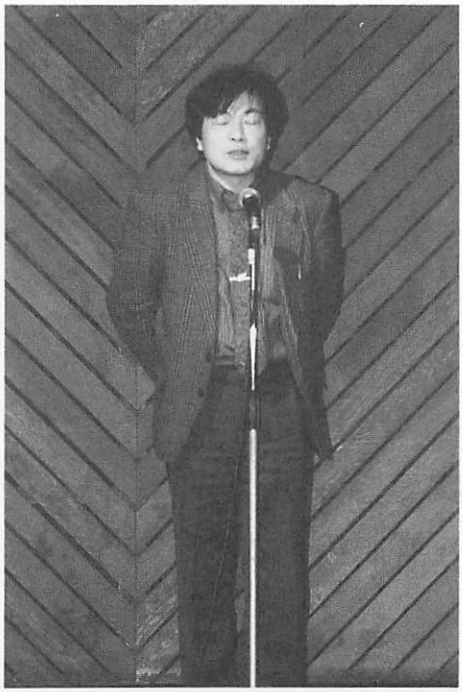
○**伊藤県教文研副所長**　皆さんどうもありがとうございました。冒頭湘南教文研の竹村所長からも話がありましたけれども、神奈川の「ふれあい教育」で個性・共生・共学というのがありますけれども、人と社会と自然と、その中で私たち学校、私自身と子どもたちがどうつながっていくのか。それが大きな課題になってきておりますし、これがここ十年以上も言い続けられてきていて、なおまたそれが実現をしていないという現状にあります。きょうのお話を伺いながら、これまでの学校観や学力観とは別に、例えば環境であるとか、きょうお話に出ていました平和の課題ですとか、あるいは共生や人権の課題が新しい学力観の柱として位置づくような、そういった学校現場を子どもたちと楽しい学校をつくりながら目指していきたいと思います。

ぜひきょうのお話をそれぞれ学校現場にお持ち帰りになっていただいて、またほかの先生方にもお話をいただきながら、「新しい学校の創造」にむけてご努力をお願いしたいと思いますし、それが一日でも早く実現すること、子どもたちが常に笑顔で学校に通えるような日が一日も早く来るように祈念しながら、この会を終わりにしたいと思います。

最後になりましたけれども、シンポジスト、コーディネーターの皆さん、ありがとうございます。それからきょうのこの会を設定するに当たり、地元の湘南教文研の磯部月子専任所員他皆さんには早朝から会場の準備をしていただきました。大変ありがとうございました。お礼を申し上げて、この会を閉じたいと思います。どうもご苦労さまでした。（拍手）

○**司会**　どうもありがとうございました。これで終わります。

―閉会―



司会（県教文研事務局長　榎木　重次）

資　　料

（○シンポジスト提案要旨
○中央教育審議会　審議のまとめ(案)）

【提案要旨1】

新しい学校の創造――教育課程のあり方を考える――

前横浜国立大学　木谷　要司

一、学校は変えられるか。

学校を変えた努力もある。「続、朝の読書が奇跡を生んだ」一九九六、高文研

どうかな、と思ってはじめた朝の十分間の読書が本嫌い、読書苦手人間の生徒を変えた実例がある。

神奈川県立大沢高校でも、小でも中でも全国で。

二、東　洋東大名誉教授のシカゴ大学留学からの帰国に際してのクロンバック教授の言葉　学校の活性化の方策は、「スクールバーニング・システム」と。過去の資料にばかりよるのでなく、目の前の子どもとその将来に真に必要なものは何か、そこから出発すること、それが学校の活性化の道だと。我々も過去にこだわるべきではない。目の前の子どもと、彼らの遠い未来を見越しての発想が大事。

三、福田悦子さんの日米の学校教育の比較の話から示唆されること（別紙参照）

四、勉強、勉強がこどもの心を荒らし、学校が苦役の場に。そして根深く勉強嫌いの心が育つ。原因は試験による選別、輪切りによる心理的圧力。

勉強嫌い、学校嫌いの実態・例、教文研の子どもの生活と意識の調査95、

相模原市の「相模原教育」95・10　No.114

また詰め込まれるばかりで、疲れ果て、新しいものを造り出す活力が無くなっているのではない

か。それが国全体の活力の無さにまでなっていないか。

詰め込まれる割りには、国際学力テストの肝心な学力、考える能力、日常への応用能力で劣る。最も問題なのは、勉強が楽しいという数が、国際比較でも非常に少ないこと。（ベネッセの調査でも）楽しいという快の刺激は、脳の深部の視床下部に送られ、扁桃体にいき、ここからA10神経で大脳に興奮が送られ意欲と行動の源泉に。幼い頃からの快感を伴う学習は、それこそ生涯学習の基礎ぜひ学校でやるべきこと、学ぶことの面白さ、学ぶ喜びを教えること。

五、学校でなくてはできないことは、生涯学習の基礎、人間の社会性の育成。しかし人権教育、平和教育、という点では日本はまだ甘いのではないか世界の現実を教え無さ過ぎではないか。兵器産業、武器商人の実像、軍備や戦争の愚かしさ、桁外れの環境破壊の事実をもっと知らせるべきではないか。

学生に理科の教材に関する社会問題のビデオを見せると、一様に驚く。学習したことを、実社会の問題と結びつけて考える機会を持たないまま過ぎている。視聴する余裕もないし、入試に出ないということが、一層その傾向を助長。

六、「教え子を戦場に送るな」といってきたが、しかし、今、多くの親の教師は、子ども達を心ならずも受験戦争という戦場に送り出しているのではないか。早くも小学校三年頃から、いや幼児の頃から塾に送り出している親達は、わが子を戦場に駆り立てているともいえる。登校拒否は、その昔の徴兵拒否、あるいは戦線離脱の脱走兵?。

七、頂点に大学入試があるからというが、大学入試もこれから大きく変わる。自己推薦、面接という形式が増える?。旧来の狭い学力観ではなく、真実価値ある学力観が模索されている。自己の個性を伸ばしてきた人間が歓迎されるのではないか。自己推薦できるものを持った人間を育てることこ

そ今後の課題。

八、「できる子のための教育改革」ではなく、楽しい学校、正しい学習ができる学校づくりのための改革に。特に「楽しく」という面をもっと重視したい。

日本では「勉強」とか「刻苦勉励」という言葉が示すように、勉強を即苦しみを伴うものというように決め付けすぎている。確かに学習には苦しみを伴い努力が必要ではあるが、楽しむという面がないと決して伸びないし続かない。

今推進されようとしている教育改革を、さらなる選別の強化、教育の効率化につなげてはならない。今の子ども達の苦しみは何からきているか、声なき声に耳を傾けたい。

アメリカは、教育を最優先政策課題にするとして、国民に世界で最も優れた教育を受けさせたいとし、子どもの教育のために大幅な所得控除を企画し、全米で学校教育においての達成目標を設定したいという。これに刺激されて、日本の教育改革が子どもと教師に新たな重荷を負わせることがないようにしなくてはならい。

九、かつて、日比谷高校校長、全国高校校長会長岩下氏の言葉(昭和三十年代)「すぐれた学校はすぐれた病院と同じでなくてはならない。どんな重病人でも見捨てず活路を見いだし死中の生を作り出すようであってこそいい病院。秀才ばかりを集めて教育して成果をあげても名門とはいえまい。」

十、政界、官界、財界、学会のトップクラスの人間の犯罪が、連日新聞紙面を賑わす。それぞれ学歴社会のトップにまで登りつめた人間、そういう人間に何が欠けていたか。その欠落は日本の教育の欠点ではないか。彼らは果して例外か。

【資料1】

三、アメリカでの就学体験例から反省させられること

先頃、アメリカの一般公立校で、二人の子どもを小・中学校と数年間学ばせて最近帰国した親子からアメリカの学校教育の特色をいろいろ聞く機会があった。広いアメリカの中でもとりわけ平穏な地域で、正常に運営されている学校だったようであるが、日本の一般の学校教育と比較して考えさせられることが多かった。要約すると次のようなことである。

(1) 小学校はあまりきゅうきゅうとさせない。学校生活、集団での生活を楽しませながら社会的なマナーを自然に学ばせる。

(2) 小・中・高ともカウンセラーがいて、子どもや親の相談には気軽に応じ、問題の兆候には早めに対応し、権威をもって事を処理する。親の要望には寛大に対応してくれる。

(3) 中学になると、勉強に本格的に取り組むようになり、勉強の仕方、ノートの取り方、調べ方を丁寧に指導する。各教科についてクラス（最大二十名）の中を能力別に三グループに分け、先生はそれぞれのグループに適当な教材を与えて個に応じた指導を展開している。落ちこぼれを作らないシステムがありうまく機能している。何か分からないところがあると親切に指導してくれる。先生は朝一時間くらい前から出校していて相談に応じてくれる。日本では質問しようにも先生は忙しそうで、なかなかつかまらない。

(4) 最上級生の各教科のトップレベルの生徒が、それぞれの得意の教科で、指導役となって相談に応じてくれるチア・リーダーという制度がある。人格・学力の面で選ばれた九年生、十年生であるが、図書館で指導してくれるというアナウンスが一週間に一度ある。上級生の方が先生よりうまく指導

してくれることがある。チア・リーダーは年度末のアワード・ナイトという行事で表彰される。そして大人の名士と並んで席を与えられスピーチをするという大きな栄誉が与えられ、実に堂々と大人顔負けの主張を展開する。

(5) 授業では「考えること」が非常に重視される。先生から指名されて答えられないと自分の考えが出てくるまで先生は待つ。意見がないはずがないという建前。すべての生徒が自分の考えを持たされる。自分の意見をしっかり持たないと学校という社会で生きていけない感じがある。

(6) 小学校では、特に教科の枠にとらわれないで臨機に適当な教材、新聞の切り抜き、ニュース、地域の話題などを活用して指導を展開する。そういうことができる力量を多くの先生は持っている。（クロス・カリキュラム的な指導ということでは、こういうことが大事なのではなかろうか。）

(7) 理科の場合はレポートを頻繁に書かされる。大きなテーマの場合は一月か二月かけてまとめる。はじめに先生に計画について指導を受けてからとりかかる。参考書は三冊以上、エンサイクロペディアの利用は必須。文の書き方も丁寧に指導される。

(8) ディベイトも頻繁に行われる。子どもたちも相当に熱心になり、社会科の場合は、大統領選挙の際など、何派になるか立場を決めて分かれ、政策について討論する。環境問題など具体的な問題を材料に価値葛藤が自然に展開され、ものの見方が広がり深まる。意見を求められると何か言わないではすまされない雰囲気がある。

(9) 評価は加点主義、いいところを何とか探そうという先生の姿勢が感じられた。成績の平均も七〇点くらいであったが、日本に帰ってから試験の成績が四五点くらいで悲観していたら褒められて不審に思っていたら平均は三〇点を割っていた。日本は採点が厳しく減点主義のようである。アメリカの学校ではやる気を確認してくれた場合は点はくれた。

(10) 自分たちのいたアメリカの学校では、やる気のあるもの、勉強の意欲のあるものにはとことん対応してくれ、伸びる可能性のあるものはいくらでも伸びられるような条件が整えられているような気がする。

(11) 二十人のクラスだから授業中寝るなどということは考えられない。日本の高校に入ってみると授業中寝ている人が多いのに驚いた。

(12) ボランティアの人が学校にきて自分の職業について紹介するという機会や地域の老婦人が学校にきて、お裁縫を教えるという機会もあった。こういうボランティア活動に接して育つから、ボランティア活動への参加の動機付けはごく自然に形成されていき、多くの生徒が地域のボランティア活動のサークルに加入している。

(13) わが子二人が受けたアメリカの学校教育の印象は、学校という建物があるけれども、そこには年齢に応じての社会がある、その社会の中で、子どもは社会を学んで本当の社会人に育っていくのだという印象である。

県教文研『所報　一九九六』
「カリキュラムと授業の改革への提言」（木谷要治　著）より

【提案要旨2】

新しい学校の創造～環境教育をベースにして～

横浜市立境木中学校校長　丸茂　高

一　心の教育の構築

(1)　子供の生活実態

(2)　新七ない族

- 規範意識が弱く、基本的生活習慣が身に付いていない
- 人間関係が弱く、他への思いやりがない
- 達成意欲がない
- 生活体験、自然体験、社会体験が極端に少なく、集団遊びができない
- 五感がはたらかない
- 指示がないと動けない
- 将来の夢をもっていない

(3)　生きる力

①変化の激しい社会に生きる人間としての実践力

②自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力

③美しいものや自然に感動する心、すなわち感性

④基本的な倫理観や社会貢献の精神
⑤たくましく生きるための健康や体力

(4) 生きるための絶対条件
- 空気
- 水
- 土（食料）

(5) 環境教育は心の教育
①地球環境の危機的状況
②二十一世紀の地球
③先住民の生き方
④学校における環境教育

ア　環境教育は
物を大切にする心、他を思いやる心、命を大切にする心を育む教育
お互いが少しずつ我慢しながら共に生きていくことを五感を通して学ぶ教育

イ　価値観の変換
知識から知恵へ

ウ　体験的学習を多く

エ　すべての教育活動で取り組む
〈総合学習〉
リサイクル活動・スクールゾーンクリーン作戦・堆肥づくり・自然教室

文化祭・エコノート運動・ネイチャーゲーム・子供の森計画（古新聞とアルミ缶で国際貢献）

〈クロスカリキュラム〉［例：水］

社会科……水資源、世界の降水量

理科……水・森林の学習、薬品の処理

保健体育…私たちの飲み水、マイムマイム（フォークダンス）

家庭科……合成洗剤と石鹸、

音楽……春の小川、水の音づくり（作曲）

オ　職員室からはじめよう

カ　日常の学校生活の中で取り組む

二　学校は地域の付属機関

(1)　開かれた学校

①学校のスリム化と学校・家庭・地域教育の連携

・ネットワークづくり

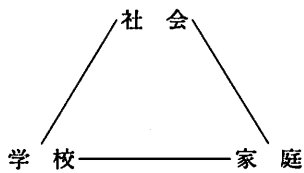
②地域社会の拠点として学校

(2)　学校公園化構想

①体験学習の場

②地域の憩いの場

③学区域を菜の花の里に、横浜をトンボの里に



三　大人が手本を示そう

①教師一人ひとりの生き方

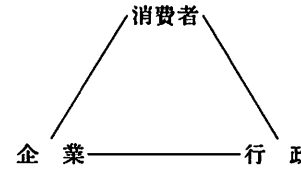
- 背中の説得力
- 競争から共生へ

②物の豊かな社会から心の豊かな社会へ

- 使い捨て文明の終焉（大量生産・大量消費・大量廃棄）

③グリーンコンシューマー（賢い消費者）になろう

- 環境によい物を買い、良くない物を買わない
- 消費者が社会を変える



【資料2】

今、地球が危ない

丸茂　高

一　地球環境の歴史

地球誕生	1/1	46億年
生命の誕生	3/28	35 〃
恐竜時代	12/8	3 〃
人類誕生	12/31 20:11	200万年
北京原人	23:03	50 〃
産業革命	3.5秒	300年
第二次世界大戦	0.3秒	50年
高度経済成長	12/31	現在

二　今、地球は

〈二十世紀の特徴〉

- 人類史上二度とない高度成長の時代
- 二十世紀型文明＝大量生産・大量消費・大量破棄『使い捨て経済』
- 二十一世紀が人類最後の世紀になるかもしれないと言われはじめた

①人口爆発…宇宙船地球号の定員は？

元年…二億人　一九〇〇年…十六億人　一九七五年…四十億人

二〇〇〇年…六十三億人　五五％増　二〇三〇年…一〇〇億人　二〇九〇年…三〇〇億人

今の地球は、この需要に応じる生産能力をもっている。

ただし、価格は二倍になり、農薬や肥料は今の数倍は使用する。

人口は五五％増えるが、農地は四％増えるだけ

②農地の減少…二〇〇〇年までに農地の1/3が農耕不可能…

●都市化・工業化によって、良好に農地が削減する

●砂漠化…一年間に六〇〇万ヘクタールが砂漠化

二〇年で砂漠が約二〇％増加する

●農業は枯渇する資源に依存している…肥料・化石燃料

一トンの穀物を生産するのに六トンの肥沃な表土が失われている。

●地球の生産限度　食料…八十億人分　酸素…一〇〇億人分

③森林の削減…森林は水の調節機能・酸素の供給源＝地球の肺

●二十世紀初めは地表の1/3が森林であった。二十年前…1/4　現在…1/5

西暦二〇〇〇年…1/6　西暦二〇二〇年…1/7

●一年間に本州の面積分が消失

一分間に三〇ヘクタール（約三〇万㎡）が消失　一日で四三二㎢が消失

一日で横浜市の面積　四三三・五七㎢に相当する森林が失われている。

●あと一〇〇年で世界の主な森林は削減

④オゾン層の破壊

・オゾン層は
・四億年前にほぼ完成、二〇～二五㎞上空に薄く存在
・〇℃／一気圧では三㎜　一九八二年にオゾンホール発見
・オゾンホールは一九九七年には南極大陸の一・五倍の大きさ

・オゾン層の
［はたらき］・生物に有害な紫外線を九九％吸収し、陸上の生物を守っている。

・オゾン層破壊の
［原　因］・クーラーや冷蔵庫の冷媒・発砲スチロールの発泡剤・精密機械の洗浄などに使われているフロンなどがオゾン分子を破壊する。
・フロン（フロン12は塩素原子二個）は十年かけてオゾン層に達し、塩素原子一個がオゾン分子十万個を壊す。

［影　響］・有害紫外線（UV－B）が増加
・皮膚ガンや白内症の患者は日本で十年前の六倍
・免疫低下、農作物の減収、プランクトンの減少による漁獲量の低下

［防　止］・フロンを作らない、使わない、捨てない。
・廃棄冷蔵庫、クーラーなどのフロン回収義務、違反には高額の罰金
アメリカ…二五〇万円　ドイツ…三〇〇万円
イギリス…三五〇万円　日本…なし

［自衛策］・先進国では、紫外線情報が毎日国民に知らされ、直射日光に当たり過ぎないように注意を呼び掛けている。

●［バーンタイム一〇ミニッツ］（直射日光は一〇分以内に）
●直射日光許容量の目安　夏…十五分　冬…三十分
●帽子、長袖、サングラス、日焼どめクリーム
●ノンフロン冷蔵庫を買う。

⑤地球の温暖化

●温暖化の

［原　因］
●二酸化炭素などの温室効果ガスが地表から放射される熱（赤外線）を吸収して再び地球を暖めてしまう。
●化石燃料（石油・石炭・天然ガス）などの大量燃焼により二酸化炭素が急増
●数千年間一定に保たれていた空気中の二酸化炭素濃度（二八〇㏙）が産業革命以後二〇〇年間に約三〇％も増え（三六〇㏙）となり、毎年〇・五％ずつ増え続けている。

［影　響］
●すでに地球の平均気温は〇・三～〇・六℃高くなっている。南極や北極では、その二〇倍の温度上昇がおこり、永久凍土が溶けたり、千葉県より大きな氷山や淡路島の六倍の氷山が南極海から漂流し始めている。
九五年に厚さ二〇〇m、面積約五〇〇㎢の棚氷が崩壊
●一〇〇年以内に気温が三～四℃上昇し、海面上昇や砂漠化により大量難民や食糧不足など深刻な事態
●二℃上昇すると海面が五〇～一〇〇㎝上昇し、数千万人が土地を失う。

［防　止］
●化石燃料の燃焼を少なくすることが最も必要

●そのためには、自動車の利用を極力少なくしたり、節電や省エネに努めることが大切。
●生ゴミなどは堆肥化し、ゴミとして燃やさない。
●エネルギー多消費の社会、経済の仕組みそものの改変が不可欠

⑥酸性雨［原　因］●化石燃料（石油・石炭）の燃焼による大気汚染物質（SO_x・NO_x）が雨に溶けて酸性雨（硫酸・硝酸）となる。
［影　響］●木が枯れ、川や湖の生物が死滅、土中から金属（特にアルミニウム）が流出し、生態系に大きな悪影響
●大理石、コンクリート、金属などの腐食
［防　止］●化石燃料の消費を減らすことが急務

⑦生物種の減少
●地球上の生物の種
確認されている生物　一五〇～一七〇万種
推定生物種の数　五〇〇～一〇〇〇万種
●産業革命から種の減少が激化する。特に、この三〇年間で激減
滅亡推定数　一日に五〇～二〇〇　種
二〇〇〇年までに五〇～一〇〇　万種

⑧土壌の浸食と有機物の流失…アメリカ全土で一年間に三一億トン（一〇トンダンプ三億台分）
●土が一㎝できるのに一〇〇年かかる。貴重な表土が急激に失われている。

⑨塩類の集積…世界の半分が塩類堆積の問題ある。

世界の灌漑地の半分が影響を受けている。
メソポタミア・エジプト文明の崩壊の原因
一年間に一二万五千ヘクタールが塩類堆積で砂漠化

⑩水…九七・五％は海水　淡水は二・五％、そのうちの七〇％は南極北極の氷
●〇・七五％の水を五十六億の人々が利用＝水不足
●世界の年間雨量　五〇〇ミリ以下が1/2　五〇〇～一〇〇〇ミリが1/4
一〇〇〇ミリ以上　日本は一八〇〇ミリで温帯性多雨地帯
●有機物質による汚染　水道水の源水には約一〇〇〇種の化学物質
世界では安全な水を確保できないために一日に二五〇〇〇人が死亡（国連発表）
●『今日流した水は、明日の飲み水』…横浜の水道水は上流の人が二～三回使用した水

⑪ごみ
●一人一日…約八五〇g　横浜市一日…四〇二八トン　年間一五〇万トン
●一人の年間ごみ処理費用…一一五〇〇円　全国では一兆四千億円
全国のゴミの焼却量　三八〇〇万トン
●世界の焼却炉の数

日本	一八四一（七三％）	イギリス	三三	アメリカ	一五二
スイス	四一	ドイツ	四九	デンマーク	四
フランス	二六〇	オーストリア	二	オランダ	一一
その他	一四六	合計	二五三九		

●ダイオキシン：世界一の汚染国はベトナム　第二は日本、数年後に世界一の汚染国

〈母乳の脂肪一g当たりのダイオキシン量、単位ピコグラム（一兆分の一）〉
日本(大阪)五一　(福岡)二四　オーストリア(ウィーン)一七　フィンランド(ヘルシンキ)一八
カナダ(ケベック)一八　アメリカ(ロサンゼルス)一七　ニュージーランド(オークランド)六
ドイツ三二　ベトナム(ホーチミン)二〇　(ハノイ)八　イギリス(バーミンガム)三七

三　世界の貧困

今、全世界では一日に三万五千人の五才以下の子供達が飢えや戦争のために死んでいる。飢えに苦しみ、生と死の境をさまよっている人が十三億人、二〇〇〇年（わずか三年後）には二十億人になるといわれている。

私たちは、貧しい国々にの大切な資源をお金で買うことによって、この豊かな生活をしているのです。世界の資源の八〇％を二〇％の人が消費し、残された二〇％の資源を八〇％の人が消費している。

〈アフリカ〉

アフリカの人口は五億三千万人、その内の二〇％一億人が餓死寸前

- 食べ物を求めて移動し、飢えは老人と子供の歩く速さで広がって行く。
- エチオピア…二〇年前は二〇％が森林であったが、今は二％に過ぎない。
- アフリカでは、毎年二七〇〇〇平方キロメートル（神奈川県：二四一二〃）の森が伐採されている。主な原因…燃料と放牧

〈バングラディシュ〉

- 一年に三万人の子供達が失明しているという。

一年に二回二粒のビタミン剤を飲めば失明しないという。一粒が五円

●使用済みテレホンカード一〇〇枚で一人の子の一年間の粉ミルクが買える。

四　百円で買える物

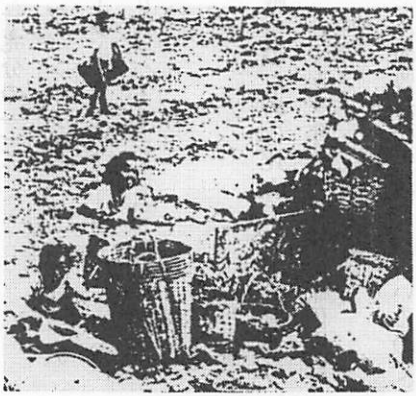
●日本の子供も三〇年前（昭和三十八年）までユニセフから粉ミルクや薬などの援助を受けていました。

一缶のジュース代でこんなに役立つ

100

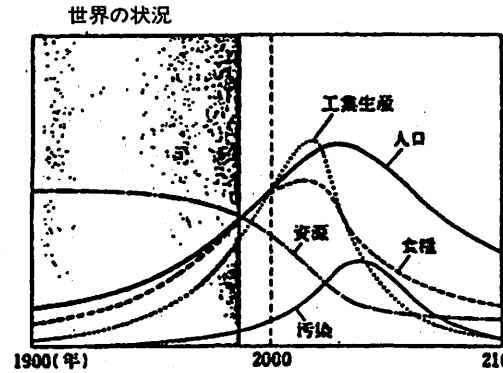
キミの募金
100円玉の大旅行
⇩ 全国の学校から
日本ユニセフ協会
⇩ 送金
ユニセフ本部
⇩
アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々から子供のための計画が送られて来ている。
⇩ 送金
キミの100円玉は、下痢から命を守る薬(ORS)10個分として使われたよ。
⇩
ありがとう
友達は元気になったよ。

100円あれば、こんなことできるよ。	
治療用ペニシリンなら	5瓶
失明を防ぐビタミンAカプセルなら	25個
包帯なら	4本
子供の健康をチェックする発育グラフなら	8枚
ノートなら	10冊
チョークなら	31本
鉛筆なら	25本
8種類の予防接種（一人分）なら	0.1セット
ORS（経口補水塩）	10袋
（1ドル100円として）	

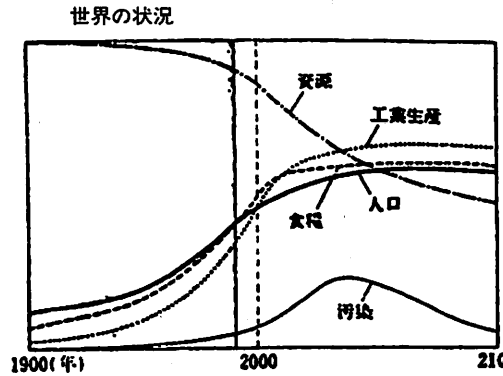


ゴミの中から売れる物を拾って生活費を稼いでいる子供たち

五　二十一世紀の地球は？



シナリオ1　スタンダード・ラン(標準計算)



シナリオ10　人口と工業生産の安定化に加え、汚染排出、土地侵食、資源利用の削減に関する技術を1995年に取り入れた場合

六　地球を残してください

1　インドの先住民族チプコの言葉（一九九二年モントリオール国際環境会議より）

サングララル・バフグナ師

私たちはチプコと呼ばれている。チプコというのは、インドの言葉で抱き付くという意味。私たちは木が切られる時、木が切られないように木に抱き付く。そして木と共に切られ、すでに二百人が死んだ。今、私たちの森にあなた方の国からたくさんの人が来て、たくさんの木を切り、たくさんのダムを造ろうとしている。ダムができると森が沈み、私たちは生きていけない。このようなこ

とが二度と行われないように、私たち十万人のチプコは死ぬ覚悟をしている。

よく聞いてほしい。私たちは決して貧しくない、私たちは豊かだ。私たちは何も欲しくない。ダムも、電気も、お金も。あなた方は経済という宗教にとりつかれてしまった。あなた方の神様はお金、儀式は開発、生けにえは地球。あなた方の神様からの贈物は、飢えと公害と戦争。開発は自然を殺し、一時の富をもたらすが、永遠の生活と幸せを失う。私たちは開発ではなく、幸せを求めている。

幸せとは、小さな土地と少しの水と少しの食べ物で十分なのだ。幸せはお城から来るのではなく、自然の中にすでにある。悩みは欲の中にあり、幸せとは欲から解放されること。あなた方はどうして、この当たり前のことを忘れてしまったのだろう。あなた方はどこへ行くのか。

（この老人はダムの開発に反対し、四十五日間服役し、その間抗議のために断食をした。この「ナルマダ渓谷開発計画」は日本のＯＤＡにより推進され、二五〇の村が水に沈んだ。）

2　大人へのメッセージ（一九九三年グローバルフォーラム京都会議の閉会の辞）

セプリン鈴木（十三歳）

価値の転換の秘密は、子供の頃を思い出すことです。自然の中で遊んだこと、それがどんなに好きだったか、それがどれほど大切だったか、大人が何でも解決してくれると信じていたこと、何が正しく何が間違っていたかを思い出してください。

あなた方の中の子供の心は、一番大切な価値や本質を知っています。それなのにあなた方の興味は出世やお金儲けのことばかりです。あなた方は「子供のとき、自然は何時もそばにあった」という思い出をもつ最後の世代になってしまうのではないでしょうか。すでに都会の子供たちには、自

然に触れ合った経験はありません。

私は二十一世紀に二十一歳になります。あなた方の残した地球で生きることになるのです。私たちが生きることのできる地球を残すには、大きな変革を急いで実行する必要があります。本当にそれをしてもらえるのでしょうか。もし、あなた方がやらなければ、いったい誰がするのでしょうか。

ソマリアやバングラデシュでは子供たちが飢えで苦しんでいます。私には貧困や公害をなくすことのできるお金が、破壊や殺人のために使われていることが不思議でなりません。私は、子供環境機構で自然保護活動をしていますが、何時も「経済が第一だ」という論争に巻き込まれます。でも、きれいな空気、水、土がなければ、どうやって生きていけるのでしょうか。あなた方はどうしてそれがわからないのですか。

私の両親は環境保護の活動をしています。私はそれを誇りに思います。将来を失うということはとても恐ろしいことです。お金がなくなったり、株が下がったりすることとは比較になりません。私はたくさんの動物、鳥や昆虫を見ることができましたが、はたして私の子供はそれらをみることができるでしょうか。

あなた方は子供のとき、こんな恐ろしい心配をしたことがありましたか。

すべてあなた方の時代から始まっています。そして「まだ大丈夫、まだ時間がある」ように振る舞っています。

でもオゾンホールの修復の仕方を知っていますか。

死んでしまった川にサケを呼び戻せますか。

絶滅した動物たちを生き返らせられますか。

砂漠になってしまった森を元に戻せますか。

それができないのなら、せめて、もうこれ以上壊すのはやめてください。

ブラジル地球サミットのとき、リオで道に住んでいる子供（ストリートチルドレン）をみて、ショックを受けました。その一人が私に「もし、僕がお金持ちだったら、みんなに食べ物や服や小屋をあげるのに……」と言いました。必要なものすべてを持っているあなた方が、なぜ、もっと欲しがるのでしょうか。このグローバルフォーラムで聞いたことは、去年リオでも聞きましたが、私には混乱はさらにひどくなるように思われます。会議で決められたことが実行されるのは、何時のことでしょう。本当に心配でたまりません。

あなた方は私たちのモデルです。私たちはあなたがたのようになろうとしているのです。どうか、お手本を見せてください。勇気を失わないでください。「他の子の言うことなど気にしないで、人の真似をするんじゃありませんよ」と言うではありませんか。どうして、変化をおそれるのですか。

最後に、世界中の子供たち、未来の人たち、動物、植物を代表してたずねます。

「あなた方は何を遺産として私たちに残してくれるのですか」

「あなた方は、いったい何を持っているのですか」

…ありがとうございました。

（一部省略・高木善之著「地球村宣言」より）

【提案要旨3】

1997．2．15
平塚市立金田小学校
小山神一

「生活科と地域とのかかわり」

地域とのかかわりもいろいろな側面を持っているようです。
例えば大きく分けると…
◇地域に出ていくかかわり　◇地域を取り込むかかわり
◇地域の人に来てもらうかかわり
◇特定な人とのかかわり　◇不特定な人とのかかわり
◇全体を対象に　◇特色を対象に　…ｅｔｃ

□　地域とのかかわりを考えた活動…　いくつかの地域の例

◎「学区探検」
（出ていくかかわり）
（不特定な人とのかかわり）

○地元の商店街や工場、会社または牧場などへ事前のコンタクトを取り、子どもたちの活動の深まりや広がり、達成感や成就感を得られる手だてとして。
◇商店街には、事前に地域探検への協力依頼状とともに挨拶まわりに行く。毎年のことになってくれば、商店会長のみに連絡する。子どもが探検しそうな場所にも前もってお願いを学年の先生で手分けしてしておく。

◎「祭りをしよう」
（特定な人とのかかわり）

○自分たちの祭りをするために、地域のお祭りを調べよう、ということで自治会長さん（場合によっては、祭りの担当の古老）に祭りの由来や地域での様子などについて伺う。
また、自分たちのお祭りに招待し同時に感謝の意を表す。
◇事前に趣旨を説明し、子どもたちの質問に答えて頂くことまで了解しておいてもらう。
また、子どもに先立って教師側でも聞いておく。

◎「野菜を作ろう」
（特定な人とのかかわり）
（来てもらうかかわり）

○地域から借りている農園を使っての栽培活動で、その下準備としての農園整備や、栽培の仕方の説明などに協力してもらう。
耕しは、子どもが進めていくことが原則だが、子どものカだけでは不十分なので、事前に機械で耕しておいてもらうこともある。
◇学校として、「農業協力員」として登録し、年間を通して学年を問わず協力してもらう。
平塚では、ふれあい教育費として学校独自で使える予算があり、謝礼などに当てている。

◎「七夕踊りをしよう」
（特定な人とのかかわり）
（来てもらうかかわり）

○市街地の学校で、毎年やっている七夕の時のパレードにみんなで出ようという発想。そしてどうやって七夕踊りをマスターしていくかという問題場面から、以前行ったことのある公民館で七夕踊りを練習している老人会の人

たちに教えてもらおうということから交流が始まる。
この活動を通して、子どもたちとおばあさんとの心が通いあうというところまでつきあいが深まり、当日は地元の商店会として出ているおばあさんたちと、子どもたちが肩を並べて踊るということでクライマックスを迎えていく。

◎地域マップ

○地域を理解するために。（探検した結果として）
教師達が、子ども達が、作る。
使うために利用する。作るために考える。

◎人マップ

○講師として教えていただける人の様子。
（作成は比較的少ない）

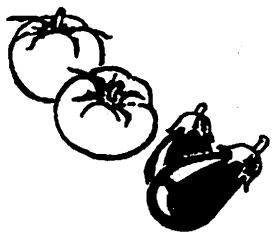
☆地域の“人”が対象となるので、コンタクトを取り、打ち合わせをし、お願いをするということが煩雑になり、人が変わったりしていく中で、次第に低調になっていく傾向もある。もちろん地域によっての差もあるようです。

☆また、それぞれのマップ作りも、４～５年前の頃のように盛り上がったときには作るが、今更必要があるのかという雰囲気もあります。

□ かかわりを持つための糸口として

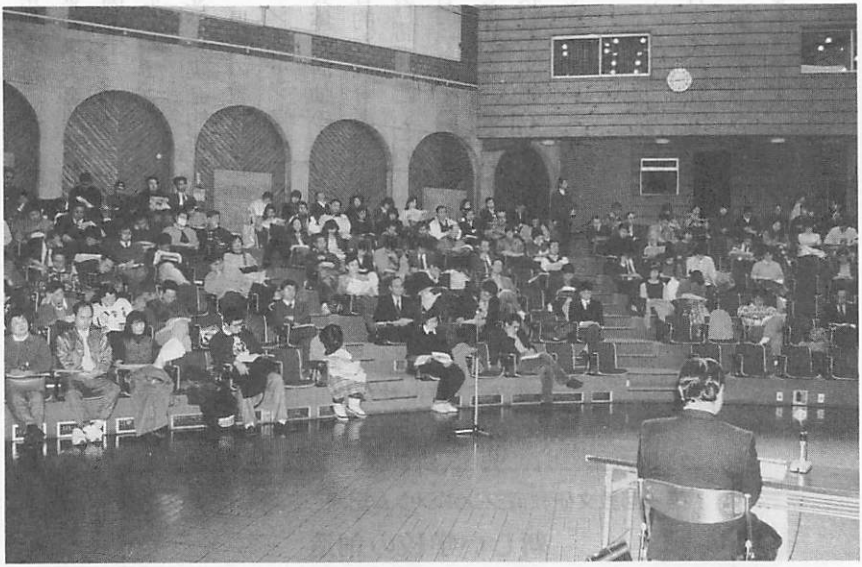
◎ＰＴＡのふれあい祭りなどの行事で、地元の古老をお招きし、「わらじ」「たけうま」などの伝統的なものの制作コーナーをいくつか設け、子どもや先生親共々教えてもらうという実践もあるようです。

□ その他の場面でのかかわり



◎借りている農園での全校のかかわり。
栽培活動。

☆ 地域を取り入れる、地域に出ていくということは、その時だけこちらの都合で一方的に“利用する”というわけには行きません。先生と地域の人、学校と地域の人など、日頃からのかかわりを重ねていってこそうまくいくことでしょう。
さらには、地域とのかかわりの価値づけを再考する必要もありそうです。



神奈川県教育文化研究所（県教文研）は、神奈川県教職員組合が主任手当の拠出金の果実を基金として、一九八〇年に設立した研究機関です。

県教文研の目的は、「県民の立場にたって民主教育と文化を確立するための理論的並びに実証的研究と全県的な教育と文化運動を展開し、県民の教育文化の向上に寄与する」ことです。「教育シンポジウム」の開催も、目的に添った県教文研の具体的活動の一つです。

「教育シンポジウム」では今日的な教育諸課題をテーマとしています。そして、「教育諸課題」をめぐって、保護者・県民、教職員、研究者等で、その現状やあり方、課題について論議し理解を深め合ってきました。県教文研の活動が、神奈川の教育と文化のさらなる前進の力として生かされることを願っています。

「第10回教文研教育シンポジウム」開催にあたっては、共催をいただいた湘南教育文化研究所の竹村雅夫さん、先崎秀世さんをはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。

（県教文研）

表紙カット　滝沢　博（県教文研事務局長）
三谷敬一（川崎市立中野島中学校）

第10回教文研教育シンポジウム記録

新しい学校の創造

――教育課程のあり方を考える――

1997年7月7日

発　行：神奈川県教育文化研究所
横浜市西区藤棚町2－197
神奈川県教育会館1階
☎・FAX 045－241－3497

印　刷：㈲神奈川教育企画
☎ 045－253－3435

KYOBUNKEN